

大阪学院大学

国際学論集

第34巻第1・2号 2023年12月

論 説

日英語における連続動詞構文：非定形動詞の比較
..... 近松 明彦—— 1

同文館論争における保守派の再検討－楊廷熙の上奏を中心に－
..... 根無 新太郎—— 29

Technological Bleed-through: The Transformative Effects of Technology
on Text
..... CHRISTOPHER MUELLER—— 53

会員業績..... 69

大阪学院大学国際学学会

日英語における連続動詞構文：非定形動詞の比較

近 松 明 彦

Serial Verb Constructions in English and Japanese: Non-finite Forms Comparison

CHIKAMATSU AKIHIKO

ABSTRACT

This paper aims to clarify the presence of serial verb constructions in Japanese and English. While some linguists have argued for the existence of serial verb constructions in Japanese, others have asserted that such constructions do not exist in English. In this paper, we propose two general forms: (1) “the general form of serial verb constructions with *renyoukei* in Japanese” (“Verb 1 + Verb 2, where Verb 1 is infinitive”) and (2) “the general form of constructions related to serial verbs in English” (“Verb 1 + Verb 2, where Verb 2 is non-finite”). We examine whether the *renyoukei* forms of Japanese verbs correspond to English infinitives, considering that there may be minimal differences between (1) and (2). Our analysis investigates whether the *renyoukei*/infinitive form of Japanese verbs aligns with the primary usages of English infinitives. The results indicate that there are instances where Japanese *renyoukei* forms functionally correspond to English infinitives, but there are also instances where they do not. This suggests that while serial verb constructions in Japanese may share properties with English constructions related to serial verbs, we cannot definitively claim that the two languages entirely share properties of serial verb constructions.

1. はじめに

本稿は、連続動詞構文が日本語、及び、英語に見られるのか、見られないのか、という問題を解明することを目的とする。

まず、連続動詞パラメータ等の原則、日本語における連続動詞構文、英語における疑似連続動詞構文を概観したうえで、英語の不定詞と比較・対照するという観点から日本語における連用形を考察する。「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」と「英語連続動詞類似構文の一般形式」を仮定したうえで、日本語動詞の連用形が一部の英文による文献において *infinitive* と呼ばれていることに着目しながら、両者の間の相違がさほど大きなものではないのではないか、という可能性について、検討する。そのために、英語動詞の不定詞と日本語動詞の連用形の用法に関する対照分析を試みる。英語の不定詞の主要な用法について、その各例文の和訳を分析し、英語不定詞と日本語動詞の連用形の対応関係を確認する。

そしてその結果、英語不定詞と日本語連用形動詞の間の用法上の対応が部分的な対応であることを示す。更にそのことから、「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」と「英語連続動詞類似構文の一般形式」が完全な対応を示すのではなく、部分的対応を示すという結論を示唆する。

以上のことを通して、連続動詞構文が日英語の各々に見られるのか、見られないのか、という問題について、また、動詞連続に関する一般言語学的な理解について、何らかの示唆が得られるのではないかと考える。

2. 連続動詞構文について

郡司 (2011) は、その第3節「日本語の位置」において、H「連続動詞パラメータ (serial verb parameter)」を取り上げている。それによると、動詞連続パラメータとは、

- (1) 1つの動詞句に複数の動詞が含まれていてもよい。

(郡司, 2011:7)

といったものとされている。そして、同論考は、「日本語でも、次のような複合動詞は連続動詞の一種と考えられる。」（郡司, 2011:8）ということ述べ、次のような例を挙げている（次のa.の例では目的語が共有されており、b.の例では主語が共有されている、と郡司（2011）は指摘している）：

- (2) a. (糊を) 煮溶かす、(ほこりを) たたき出す、(糸を) 巻きつける
b. (彼らが) 泣き崩れる、(皆が) 歩き疲れる、(我々が) 飲み歩く
(郡司, 2011:8)

このように、郡司（2011:8）においては、日本語に関して、上記の動詞連続が該当すると考えられている。一方、郡司（2011:8）に見られる「英語と日本語のパラメータ対応」（郡司（2011:8）における(16)の表）においては、その末尾（右端）に見られるパラメータHの箇所で、英語に関して「×」という値が、日本語に関して「○」という値が与えられている。このことから、郡司（2011）においては、この「動詞連続」が日本語に当てはまるのに対し、英語には当てはまらないという判断がなされていることがわかる。

3. 日本語における連続動詞構文

上の郡司（2011:8）における動詞連続に関する考え方と関連付けられ得る見解として、浅尾（2009）に見られる見解を挙げることができる。浅尾（2009）は、動詞連続に関する日韓対照分析を行っているが、その中では次の3種類の形式が議論の対象として取り上げられている。

- (3) a. 日本語連用形動詞連続
走り去る
b. 日本語テ形動詞連続
持って行く

c. 韓国語-e 形動詞連続

kal-a tha-ta

替える -e 乗る

乗り換える

(浅尾, 2009: (1))

上に引用した3種類の形式について、浅尾（2009）は、その注1の中で「これらの構造には従来、複合動詞（compound verb）、補助動詞構文（auxiliary verb construction）、連続動詞構文（serial verb construction）をはじめさまざまな名称が与えられてきている。ここでは、理論的な位置づけにかかわらず、表面上動詞が連続しているものを全て議論の対象とするため、便宜上『動詞連続』という用語をカバータームとして用いることにする。」（浅尾, 2009: 1）と述べている。このように、日本語で伝統的に複合動詞や補助動詞構文などの名称で言及されてきたものを、類型論的・普遍的な文脈の中で動詞連続の一種として解釈するという見方が存在するものと理解することができる。

ここで、郡司（2011）における動詞連続と浅尾（2009）における連続動詞構文を比較しておくことにする。冒頭で郡司（2011: 8）から引用した例、すなわち、「(糊を) 煮溶かす」「(ほこりを) たたき出す」「(糸を) 巻きつける」「(彼らが) 泣き崩れる」「(皆が) 歩き疲れる」「(我々が) 飲み歩く」などの例は、上に引用した浅尾（2009: (1)）における、「日本語連用形動詞連続」（例：「走り去る」など）に相当するといえると筆者は理解している。しかし、先に見た郡司（2011）における動詞連続において、連続動詞構文の有無が言語類型論上のパラメータとして扱われていたのに対し、浅尾（2009）においては、上でも引用したように、「便宜上『動詞連続』という用語をカバータームとして用いることにする。」（浅尾, 2009）という立場を採っている。連続動詞に関する定義に様々なものがあり、一口に連続動詞といってもその内容は多様であるように見える。そのようなことから、動詞連続という概念を、ただ厳密な媒介変更（parameter）として捉えるだけでなく、言語学の研究史の中で、事実上存

在してきている概念として捉える方が実情に合っているという認識も交える方が望ましいと本稿においては考えている。

4. 英語における連続動詞構文

郡司（2011: (16)）においては、上記の動詞連続が日本語に関して該当するのに対し、英語について該当しないものと見做されていることを本稿は上での議論の中ですでに確認していたが、ここで、Pullum（1990）による指摘を取り上げることにはしたい。

Pullum（1990）は、現代口語英語における擬似連続動詞構文（quasi-serial verb constructions）を取り上げている。そして、その中で主に分析の対象とされているのは、次の例に見られるようなものであって、Pullum（1990:218）はそのような型の構文を *go get* 構文（*go get* construction）と呼んでいる。

(4) Come fly with me.

(Pullum, 1990:218)

とはいえ、この *go get* 構文は、標準的な現代英語の表現としては十分一般的なかたちで定着していると断言することは難しいと筆者には感じられる。*go get* 構文は、例えば次のような、*to* 不定詞を伴った、より一般的で標準的な形式と競合しているように見える。

(5) Her children seldom come to see her.

(Declerck, 1991:180)

また、江川（1991: § .247, B. (1)）は、“*go to see*” と同じ意味で、“*go and see*” という形式が用いられることを示したうえで、類例として次のような等位接続の例などを挙げている。

(6) Come and stay with us.

(江川, 1991: §.247, B. (1))

さらに、江川 (1991: §.247, B. (1)) は、「『米』の口語ではgoに続く and が省略されることがある。」としながら、次の例を挙げている。

(7) Go fetch some water.

(江川, 1991: §.247, B. (1))

この“go fetch”を用いた例は、Pullum (1990) における *go get* 構文の例と同一視することができると筆者は考える。そうであるとすれば、*go get* 構文が等位構造の省略形である、という解釈も取り敢えず成り立つかもしれない。

このように、英語においては、部分的に擬似連続動詞構文があるものの、連続動詞構文と比較し得る一般的な英語の構文として、等位接続構造を挙げることができると筆者は考える。さらにそれとともに、連続動詞構文と近い性格を持つ英語の構文としては、主動詞 (main verb) にもう一つの動詞の non-finite の形式が後続するという構造を挙げることができると筆者には思われる。

村田 (2013) においては、中国語における動詞連続構文 (連続動詞構文) と対照する文脈で、「英語では、動詞連続構文はほぼ全て容認されない。代わりに、動詞を分詞や to 不定詞に『格下げ』して表現する。」(村田, 2013:58) ということが述べられている。そして、それに続いて、村田 (2013) においては、他の例とともに、次のような分詞構文の例などが挙げられている。

(8) He came into the room, singing a happy song.

(村田, 2013: (32c))

このように、英語連続動詞類似構文の一般形式は、一般に次のような形

式（英語連続動詞類似構文の一般形式）を持っていると考えることができると筆者は考える。

(9) 英語連続動詞類似構文の一般形式：

動詞 1 + 動詞 2，ただし動詞 2 は non-finite.

5. 英語の不定詞との比較の観点から見た日本語の連用形

このような連続動詞構文と比較し得る英語の構文に関して、日本語の連続動詞の分析と対比するとどのようなことが言えるであろうか。上で引用した浅尾（2009: (1)）における、日本語連用形動詞連続（例えば、「走り去る」など）、日本語テ形動詞連続（例えば、「持っていく」など）に関して、連続する2つの動詞のうち、ひとつ目の動詞は、それぞれ、連用形、テ形という特定の活用形が現れている。すなわち、日本語の連続動詞構文とされるものにおいて連続するふたつの動詞のうちの一方は、必ずしも特徴的でないとは言えないと筆者は感じるのである。このことは、ちょうど英語において、主動詞にもう一つの動詞の non-finite の形式が後続するという構造が、連続動詞構文と比較し得るものであるとする、上記の見解（本稿の見解）を思い起させる要素があると筆者は考える。すなわち、この議論のなかで、日本語における連用形やテ形が、英語における non-finite の形式と比較され得る状態になっていると筆者は考える。そのようなことから、ここでは、特に日本語における動詞の連用形について、若干の分析を試みることにする。

6. 日本語における連用形の用語法について

Iwasaki (2013:79) は、日本語の動詞「飲む」を例として、子音動詞 (consonant [root] verb) の例である *nom-*（「飲む」）の活用上の諸形式を表（Iwasaki (2013:79) の Table 1. “Consonant verb forms”）の中に示しながら、次のように述べている。

(10) The stem with the =i-suffix is the infinitive form.

「=i-接尾辞を伴う語幹は、不定形 (infinitive form)」である。」

(Iwasaki, 2013:79)

このIwasaki (2013) による記述は、実質的に日本語の動詞「飲む」の連用形「飲み」について述べており、日本語において伝統的に「連用形」と呼ばれてきた形式が、Iwasaki (2013) における infinitive (「不定詞」) に対応していると理解することができる。Iwasaki (2013:79) は、その注1において、この infinitive という用語が Martin (1975) によるものであることを指摘したうえで、その形式が伝統文法において連用形として知られているものであることを示し、さらに、この infinitive に当たるものが Shibatani (1990) における “adverbial” form (「副詞」形)、Kuno (1973) における “continuative” form (「継続」形) など、様々な形で英訳され、広い範囲に及ぶ機能を示唆している、といった内容のことを述べている (Iwasaki, 2013)。そして、確かに、Martin (1987) においては、infinitive に関する記述に多くのページが割かれている (しかも、infinitive に関する議論の多くが、adverbializations に関連した文脈の中に見られ、このことは、Shibatani (1990) において連用形が “adverbial” form (「副詞」形) という表現で言及されていることを思い起こさせる)¹⁾。ちなみに、池田 (2013) に基づくならば、日本語動詞の連用形を infinitive として扱うことは、少なくとも1940年代の Bernard Bloch による研究にさかのぼることができる。Bernard Bloch の分析に基づくならば、例えば「待つ」の Infinitive、すなわち、[不定詞形] は、mát-i であるという (池田, 2013)。これは、伝統的に連用形と呼ばれている形式と合致している。

7. 日英語の連続動詞構文の可能性について

ここで、浅尾 (2009) における日本語連用形動詞連続を再び取り上げる

1) Samuel Martin による著書、*A Reference Grammar of Japanese* について、筆者が直接参照した版は、Martin (1975) でなく、Martin (1987) である。

ことにする。日本語連用形動詞連続は、例えば次のようなものであった。

(11) 走りさる（＝(3a)）

（浅尾, 2009）

もし日本語動詞の連用形がinfinitiveであるとすれば、上の連用形動詞連続は次のような形式（「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」）を持つものとして一般化できると筆者は考える（敢えてinfinitiveという英語による用語を使っている）。

(12) 連用形による日本語連続動詞構文の一般形式：

動詞 1 + 動詞 2, ただし動詞 1 はinfinitive.

例えば、上に例示した「走りさる」であれば、前半に現れる連用形「走り」は動詞 1 に相当し、敢えて英語の用語を使うとすれば、infinitiveと呼ぶことができる。それに対し、後半に現れる終止形の動詞「さる」は動詞 2 と見なすことができる。この「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」は、本稿における上の議論で示した「英語連続動詞類似構文の一般形式」、すなわち、次に再録するものを思い起こさせるであろう。

(13) 英語連続動詞類似構文の一般形式：

動詞 1 + 動詞 2, ただし動詞 2 はnon-finite. （＝(9)）

日本語動詞の連用形がinfinitiveであるとし、それが英語のinfinitiveと比較可能なものであるとすれば、それは、non-finiteのひとつであり、そのように考えると、日本語の「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」が「英語連続動詞類似構文の一般形式」と近い関係にあると論ずることができる可能性が生じてくる。

ただし、日本語においてinfinitiveであるのが、動詞 1 であるのに対し、英語においてこれに対応するnon-finiteとなっているのが動詞 2 であると

いうことについて、留意すべき点がある。日本語と英語の語順の相違によって説明されるものと筆者は考えている。例えば、次の英文とその和訳を比べてみることにする。

(14) a. The prizewinners *stepped forward proudly*.

b. 入賞者は誇らしげに前に出た。

(江川, 1991:136)

前者の英文において副詞 *proudly* が動詞 *stepped forward* に後続した位置に現れるのに対し、後者の和訳において副詞的要素（言語学的には副詞的に機能する後置詞句）である「誇らしげに」は動詞「前に出た」に先行した位置に現れている。このように、副詞的に機能する要素は、英語では動詞に後続し（すなわち、動詞の右側に生じ）、一方、日本語では動詞に先行しており（すなわち、動詞の左側に生じており）、このことは、語順に関して日英語間で対称的な状態を生みだしている。ここで、日本語における「動詞 1」にせよ、英語における「動詞 2」にせよ、*infinitive* の、あるいは、*non-finite* の動詞的要素が副詞的（*adverbial*）に用いられた要素であるとするならば、英語では動詞に後続する要素となり（「動詞 2」として具体化）、日本語では動詞に先行する要素となる（「動詞 1」として具体化）。このように、「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」と「英語連続動詞類似構文の一般形式」の間に見られる、*infinitive/ non-finite* と定動詞の語順に関する対称性は、副詞的要素と動詞の語順についての日英語間の差異の例の一部を成すものとして説明することができる²⁾。

ここで、上ですでに触れた事柄であるが、郡司（2011:8）において、動詞連続パラメータが、日本語に該当する一方で、英語について該当しないものと考えられているという見解（郡司, 2011: (16)）に立ち返ることに

2) なお、この分析は日本語の連用形が副詞的に機能していることを前提としており、このことは、連用形における、いわゆる中止法が等位構造と関係するという分析よりも、むしろ、副詞的な従属節と関係するという分析の方を支持する要素があることを示唆している。

する。なるほど、infinitive/ non-finite と定動詞の間に、日英語間の語順上の対称性が含まれはするものの、「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」と「英語連続動詞類似構文の一般形式」の間には、相当な平行関係が存在する可能性があることを我々はすぐ上で見た。もしそうであるとすれば、郡司（2011）の言う、動詞連続に関する日英語の間の差異・対立が、実は余り明確なものではなくなってしまう可能性がでてくる。

8. 日本語の連用形の機能と英語不定詞の機能

以上のように、日本語の連用形が英語の不定詞等の non-finite の要素に近い性格を持つのではないかという仮定のもとに議論したが、この仮定は、日本語の連用形に相当する語形が、英語圏の研究者によって infinitive として分析されてきているという学説史上の経緯に依存しており、また、用語法に基づいた仮定でもある、といった点で十分確実なものではないと言える。日本語動詞の連用形と英語の不定詞が適切に比べられると判断するためには、単に用語が共通しているからというだけでは根拠が十分ではなく、本来は、日本語の体系の中で連用形がどのように振舞うかということと、英語の体系の中で不定詞がどのように振る舞うか、ということに関して対応関係を確認することが求められるであろう。

英語の不定詞については、伝統文法において、分詞、動名詞とともに準動詞の一つとして扱われることが一般的であろう。そして、準動詞は、non-finite verb、すなわち「非定形動詞」と同一視されると言える。伝統文法では一般に、英語の不定詞の用法は、名詞用法、形容詞用法、副詞用法（副詞用法には、更に目的、結果、原因、理由、ほか、多くの下位区分がある）に分類され、加えて不定詞に関係した個別の特徴的構文等に関する分析が行われることが多い（例えば、江川（1991:Ch.13）など）。ここで、江川（1991:Ch.13）の挙げている英語不定詞の諸用法の用例を以下に引用する（副詞用法については、目的、結果、原因、理由等が主要なものと考えられるので、それ以外の副詞用法やその他の不定詞に関係した特徴的構文等については、ここでは省略する）。

- (15) a. 名詞用法：To become an expert at anything takes time.

(江川, 1991:315)

- b. 形容詞用法：There's a lot to see in Rome.

(江川, 1991:318)

- c. 副詞用法（目的）：What are the raw materials used to make plastic?

(江川, 1991:319)

- d. 副詞用法（結果）：My grandfather lived to be ninety.

(江川, 1991:319)

- e. 副詞用法（〔感情などの〕原因）：

We are delighted to learn of the arrival of your baby.

(江川, 1991:319)

- f. 副詞用法（〔ある判断の根拠になる〕理由）：

What a fool I was to think that she really loved me!

(江川, 1991:319)

なお、上記の各用法のうち、連続動詞構文との関連で特に注目されるのは、副詞用法である。副詞用法の例においては、定形動詞と不定形動詞という違いはあるものの、同じ節の中に2つの動詞が共存することになるという点で、連続動詞構文との類似性が見られるからである（本稿冒頭で引用していた連続動詞パラメータ、すなわち、「1つの動詞句に複数の動詞が含まれていてもよい。」（郡司, 2011:7）という原則を参照）。例えば、上の例におけるa-文からf-文のうち、副詞用法の例であるc-文からf-文のそれぞれについて、c-文であれば定動詞 *used* と不定詞 *to make* が、d-文であれば定動詞 *lived* と不定詞 *to be* が、e-文であれば定動詞 *are delighted* と不定詞 *to learn* が、f-文であれば定動詞 *was* と不定詞 *to think* が、同じ節の中に共存しているということになる。このように、連続動詞構文との関連性という観点から言って、特に副詞用法について最も注目される要素があるのであるが、とはいえ、名詞用法、形容詞用法も含め、以下に英語の不定詞の複数ある諸用法に対応する日本語の例文を確認していくことにする。

I. 名詞用法

上記の(15)のa-文、すなわち、“To become an expert at anything takes time.” (江川, 1991:315) に対応する日本語としては、次のものなどがある。

(16) a. 何事にせよエキスパートになるには時間がかかる。

(江川, 1991:315)

b. いかなることの専門家になることも、時間を要する。…… (直訳)

(拙訳)

ここで、小泉 (2008:27-8) が、「動詞を名詞に転用する場合、2つの方法がある。」としていることを思い起こしてみることにする。小泉 (2008:28) は、動詞を名詞に転用する方法として、「語幹母音を /i/ とする方法」(語幹末母音による名詞化)と「形式名詞『コト』や『ノ』を動詞の形容詞形が修飾する形で名詞句を形成する方法」³⁾ という2つの方法に触れている。これら、2つの方法のうちで、上に示した「直訳」(筆者が訳したb-文)では、「形式名詞『コト』や『ノ』を動詞の形容詞形が修飾する形で名詞句を形成する方法」を用いている。それに対し、比較のために、もう一方の方法である「語幹末母音による名詞化」(言い換えると、連用形による名詞化)を行うと、この場合、次のように容認不可能な文が得られることになってしまう。

(17) *いかなることの専門家になり (「成り」) も、時間を要する。

(筆者の作例)

このことは、日本語動詞の連用形／infinitiveによる名詞化が、non-finiteの動詞の名詞用法というよりも、動詞から派生された完全な名詞であることを示している。ちなみに、動詞から派生された名詞「なり」の例としては、例えば、次のようなものを挙げることができる (複合語「法人成り」

3) 「動詞の形容詞形」という用語については、小泉 (2008:162) において「本書では『連体形』を『形容詞形』と呼ぶ。」とされている。

の構成要素として「なり」が用いられている例)。

(18) 「年の途中で法人成りをした場合の法定調書の提出」

(国税庁「年の途中で法人成りをした場合の法定調書の提出」)

この「成り」のほかに、例えば、動詞「走る」の連用形／infinitiveである「走り」を用いた次の例を見れば、連用形／infinitiveが名詞として用いられることがわかる。

(19) 彼らはジョンの素晴らしい走りに大いに感心した。

(筆者の作例)

このように、日本語動詞の連用形／infinitiveは、確かに名詞化の方法として用いられるが、とはいえ、英語の不定詞の名詞用法に直接対応する用法を見出すことはできない。

II. 形容詞用法

次に、上に引用した形容詞用法の例、“There’s a lot to see in Rome.” (江川, 1991:318) に対応する日本語の文として、次の文を考えることにする。

(20) a. ローマには見物すべき名所が多い。

(江川, 1991:318)

b. ローマにはたくさんの見るものがある。…… (直訳)

(拙訳)

c. *ローマには見たくさんのものがある。

(拙訳)

すぐ上のb-文に現れている「見るもの」について、日本語における「見る」は「もの」という名詞を修飾する要素として機能している。この場合の「見る」は伝統文法では連体形であり、連用形／infinitiveとは異なってい

る。この点で、英語の不定詞の名詞用法と日本語の infinitive は対応していないように見える。このことは、すぐ上の c-文で明確に確認される。この c-文では、（誤植でなく）「みる」の連用形である「み」（「見」）が「たくさんのものの」直前に生じている。例えば、「ローマには見るべきたくさんのものがある。」（筆者の作例）という適格文と比較すればわかるように、「たくさんのもの」という名詞句の直前の adjectival な要素のための位置に連用形「み」を生起させてみた場合、容認することが不可能な文が生まれてしまう。このことは、連用形を形容詞的に用いることができないということを示している。

以上のように、形容詞用法については、日本語の連用形／infinitive は対応していないように見える。

Ⅲ. 副詞用法

それでは、上で「連続動詞構文との関連で特に注目される」ものとして言及した副詞用法についてはどうか。江川（1991:319-20）は、英語不定詞の副詞用法の下位区分として、「目的」、「結果」、「原因」、「理由」、「条件・仮定」、「一般に形容詞と結合して」、「独立の語句として」等を挙げている。本稿では、そのうち特に主要なものとして、以下に「目的」、「結果」、「原因」、「理由」を取り上げることにする。

（A）目的

まず、上で引用した英語不定詞の副詞用法の目的の例 “What are the raw materials used to make plastic?”（江川, 1991:319）に対応する日本語文はどのようなものになるであろうか。

- (21) a. プラスチックの原材料は何ですか。

（江川, 1991:319）

- b. プラスチックを作るために用いられる原材料は何ですか。

……（直訳）

（拙訳）

c. *プラスチックを作り用いられる原材料は何ですか。

(拙訳)

すぐ上に示したb-文(拙訳)では、目的を表わす形式として、連用形／infinitiveではなく、「作るために」という形式を用いている。これは、複合格助詞「のために」が「『の』を介さずに用言につくもの」(山田, 2004:48)の形で用いられたものである。それに対し、上のc-文に見られるように、b-文における「作るために」を「作り」という連用形と取り換えると、容認不可能な文になってしまう。

このように、日本語の連用形／infinitiveは英語の副詞用法の目的の例には対応しておらず、連用形／infinitiveと異なる日本語の形式がこれに対応しているということになる⁴⁾。

-
- 4) 多胡(2010)は、日本語に関して、「移動動詞『行く』と共起している二格をとる句」に関して、「空間性をもたず、目的規定的な結びつきがあるもの」の例として次のものを挙げている。

(i) 勉強をしに行く。

(多胡, 2010:106)

このように、日本語においては、確かに動詞の連用形／infinitiveに「に」が付加された形式が移動動詞と共起することが可能である。「行く」だけでなく、次のように、例えば、次の動詞「入る」を用いた例にも同様のことが当てはまる。

(ii) メアリーはコーヒーを飲み喫茶店に入った。

(筆者の作例)

このように、「連用形／infinitive+に」という形式で目的を表わすことが可能であるが、次のように、「に」を省略して、連用形単独で目的を表わすことはできない(φは空所を表わす)。

(iii) *メアリーはコーヒーを飲みφ喫茶店に入った。

(筆者の作例)

また、上の例は移動動詞に関する例であったが、次のように、このような二格は「買う」と共起することはできず、「ために」などの形式を用いて目的を表わすことになる。

(B) 結果

次に、同じく英語の不定詞の副詞用法の結果について考えることにする。上で引用したこの用法の例、すなわち、“My grandfather lived to be ninety.”（江川, 1991:319）に対応する日本語の文はどのようなものになるであろうか。

(22) a. 祖父は90歳まで生きました。

(江川, 1991:319)

b. 祖父は生きて、その結果、90歳になった。……（直訳①）

（拙訳）

c. 祖父は生き、90歳になった。……（直訳②）

（拙訳）

上のb-文の直訳①では、「生きて」というテ形を用い、c-文の直訳②では、「生き」という連用形を用いている。c-文の直訳②は、「結果」を表わすというニュアンスがやや希薄であり、やや不自然さを伴うように感じられる面を伴うということもあるが、筆者は一応、容認可能であると判断する。

しかし、このc-文とその和訳のもとになった英語原文の対応関係には、一定の問題がある。上のc-文における連用形「生き」は、語彙の意味に関しては、英文“My grandfather lived to be ninety.”（江川, 1991:319）におけるlivedに対応している。しかし、このlivedは、文法的には定動詞（finite verb）であって、不定詞ではない。ここで対応を観察しようとしているのは、語彙の意味の対応関係ではなく、主に英語の不定詞と日本語の連用形の文法上の対応関係である。「生き」は連用形である。このc-文における動詞「生き」（連用形）は、語彙の意味に関しては、英語のto be

(iv) a. メアリーは美味しいコーヒーをいれるために高級なコーヒー豆を買った。

b. *メアリーは美味しいコーヒーをいれに高級なコーヒー豆を買った。

（筆者の作例）

このように、連用形/infinitiveで目的を表わすことができないという観察は、たとえ以上の事例を考慮に入れても、変わることはない。

(文法的には不定詞)に対応するわけではない(図1参照)。

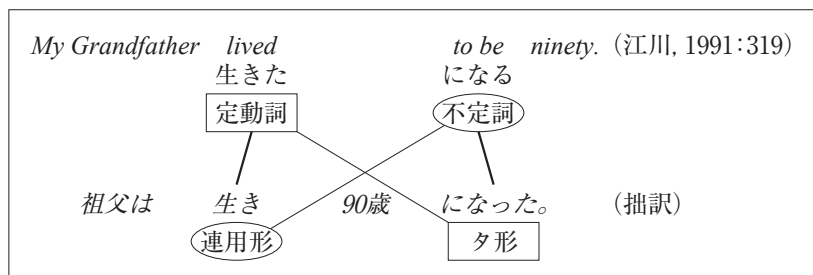


図 1

上記の問題も含めて、この副詞用法の結果の和訳について、もう少し詳しく見ておくことにする。

英語の不定詞to beは、上のb-文の直訳①では、「その結果、～になった」というふうにタ形として和訳し、また、c-文の直訳②でも、「～になった」というふうにタ形で訳出している。このc-文においては、上で示した「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」(次に再録)が、確かに保たれている。

(23) 連用形による日本語連続動詞構文の一般形式：

動詞 1 + 動詞 2, ただし動詞 1 は infinitive. (= (12))

c-文、すなわち、「祖父は生き、90歳になった。」(拙訳)において、「生き」は「動詞 1」に当たり、「になった」は「動詞 2」に相当している。

これに対し、このc-文(「祖父は生き、90歳になった。」)のもとになった英語原文を次に再録する。

(24) My grandfather lived to be ninety.

(江川, 1991:319)

この英文では、上で示した「英語連続動詞類似構文の一般形式」（以下に再録）が確かに保たれている（“lived”が「動詞1」に当たり、“to be”が「動詞2」に当たる）。

(25) 英語連続動詞類似構文の一般形式：

動詞1 + 動詞2, ただし動詞2はnon-finite. (= (9))

それにもかかわらず、繰り返しになるが、ここには上で指摘した問題がある。ここでのc-文、すなわち、「祖父は生き、90歳になった。」において、「生き」が連用形／infinitiveであるのに対し、それに対応する英文、“My grandfather lived to be ninety.”（江川, 1991:319）においては、「生き（る）」に当たる英語動詞livedが定形（finite）として現れており、不定詞（infinitive）の形をとっている英語動詞は、“to be”（“to be ninety”の“to be”）である。この“to be (ninety)”に相当する日本語動詞は、「祖父は生き、90歳になった」における「(90歳) になった」というタ形の動詞である。

このことには、副詞用法の目的の英文を和訳する際には、いわゆる「戻り訳」、「返り読み」が使われないという事情が影響していると考えることができる。ここで参考のために、上で引用した英語不定詞の副詞用法の目的の例、“What are the raw materials used to make plastic?”（江川, 1991:319）が、「プラスチックを作るために用いられる原材料は何ですか。」（直訳）と訳すことができたことを思い起こそう。“to make plastic”は、“used”に後続している（すなわち、前者は後者の右側に生起している）。一方、日本語訳においては、「プラスチックを作るために」が「用いられる」に先行している（すなわち、前者が後者の右側に生起している）。このように、副詞用法の目的においては、和訳の際に、日常一般に、「戻り訳」、「返り読み」などと呼ばれる和訳方式が用いられることが多い（「戻り訳」、「返り読み」は、日英語における語順の対称性を明確化する面もある和訳方式であるともいえる）。それに対し、副詞用法・結果においては、「戻り訳」、「返り読み」は用いられない。このことが、上で指摘した

副詞用法・結果における特別な性質の根底にあると考えることができる⁵⁾。

英語不定詞の副詞用法の目的の例文を和訳する際に、日本語の連用形／infinitiveを用いることが一応はできるが、上で見たように、語順に関して複雑な様相を呈する点も確かにある。とはいえ、その英語例の和訳が、「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」における、「動詞 1 + 動詞 2, ただし動詞 1 は infinitive.」という形と合致しているということを、筆者はここでは重視したいと考える。また、英語不定詞の副詞用法の目的の例文を連用形／infinitiveを用いて和訳する場合、その訳文は、なるほど日本語としてやや不自然な面もある。とはいえ、筆者は、その日本語の不自然さは許容範囲にとどまるものと判断する。

(C) 副詞用法の原因（感情などの原因）

上の議論では、副詞用法の（感情などの）原因の例として、“We are delighted to learn of the arrival of your baby.”（江川, 1991:319）を引用したが、それに対応する和訳としては、次のようなものを考えることができる。

(26) a. 赤ちゃんがお生まれになったと伺って喜んでいます。

（江川, 1991:319）

b. 赤ちゃんがお生まれになったと伺い、喜んでいます。……（直訳）

（拙訳）

すぐ上に示した和訳の a-文（江川訳）では、「……と伺って」というテ形が用いられているのに対し、b-文（拙訳）においては、「……と伺い」という連用形／infinitiveを使用している。このように、英語における「副詞用法の（感情などの）原因」の例の和訳については、日本語の連用形／infinitiveが英語不定詞に対応し、また、「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」、すなわち、「動詞 1 + 動詞 2, ただし動詞 1 は infinitive.」が当てはまっていると考えることが可能である。

5) 「戻り訳」、「返り読み」とは対立する「下り訳」については、光原（1990）を参照。

(D) 副詞用法の理由（ある判断の根拠になる理由）

上の議論では、副詞用法の（ある判断の根拠になる）理由の例として、“What a fool I was to think that she really loved me!”（江川, 1991:319）を引用したが、それに対応する和訳としては、次のようなものを考えることができる。

- (27) a. 彼女が本当にほくを愛していると思ったなんて、なんてばかだったんだろう。

（江川, 1991:319）

- b. 彼女が本当にほくを愛していると考え、なんてばかだったんだろう。

（拙訳）

すぐ上に示した和訳のa-文（江川訳）では、「……と思ったなんて」という形で「なんて」という要素が用いられている。それに対し、b-文（拙訳）においては、「……と考え」という連用形／infinitiveを使用している。この副詞用法の理由の例文の日本語訳については、すぐ上の例のa-文（「なんて」という形式を使用）が標準的な和訳であり、b-文（連用形／infinitiveを使用）はややぎこちなく、「彼女が本当にほくを愛していると考え、……」という、文の前半部分が、後半部分である「……なんてばかだったんだろう」の表す根拠を示しているというニュアンスも余り強くない。この点で、上のb-文は境界的であるといえる要素を含むが、とはいえ、連用形／infinitiveを使用したb-文も、まったく使えないわけではない。また、対応する英文“What a fool I was to think that she really loved me!”（江川, 1991:319）の本来の意味からあまりにも逸れた意味を表わすわけでもない。このようなことから、英語における「副詞用法の（ある判断の根拠になる）理由」の例の和訳について、英語不定詞に日本語の連用形／infinitiveが対応し、また、「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」、すなわち、「動詞1 + 動詞2, ただし動詞1はinfinitive.」が当てはまっているとすることは、基本的に可能である。

9. 不定詞の各用法の和訳についてのまとめ

以上の英語不定詞の諸用法に日本語の連用形／infinitiveが適切に対応するかということについての確認結果を表の形にまとめると、次のようになる。

用法		値	備考
名詞用法		-	完全な名詞化を行うことはできる。
形容詞用法		-	
副詞用法	目的	-	
	結果	+	動詞の位置等に関して日英間で対照的となる点がある。
	(感情などの) 原因	+	
	(ある判断の根拠となる) 理由	+	ややぎこちない。

表 1

上の表1において、値が正の値(+)を取る場合、当該の英語不定詞の用法に対して日本語の連用形／infinitiveが対応しているということを表すものとする。一方、負の値(-)を取る名詞場合、当該の英語不定詞の用法に対して、日本語の連用形／infinitiveが対応していないということを表している。この表1のなかで英語不定詞の名詞用法、副詞用法の結果、および、副詞用法の理由については、備考欄への記載があり、それらはいずれも、左隣にある値の極性を弱める性格を持つ。そのようなことをより単純化された形で表現することができるように、上の表1を修正するとすれば、次のようなものになるであろう(“++”と“-”は極性が比較的明確に観察されることを示し、“+”と“-”は、極性がやや弱められた形で観察されることを示す)。

用法		値
名詞用法		-
形容詞用法		--
副詞 用法	目的	--
	結果	+
	(感情などの) 原因	++
	(ある判断の根拠となる) 理由	+

表 2

このように、英語不定詞の諸用法のなかで、用法によっては連用形／infinitiveが対応するものもあれば、対応しないものもある。また、対応しないといっても、その対応しないことの程度の弱いものもあり、また逆に、対応するとしても弱い対応しか示さないものもある。このような状況は、概略のところ次のように図示することができる。

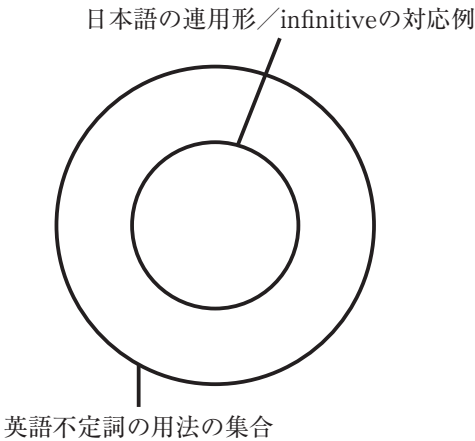


図 2

上の図2においては、英語不定詞の用法の集合の一部が、日本語の連用形／infinitiveの例と対応している状態が示されている。ただし、本稿では、英語の不定詞に対応する日本語の例を分析したのであり、逆に日本語の連用形／infinitiveの諸用法にどのような英語表現が対応しているかということも含めた、徹底した調査は本稿における調査の対象には入っていなかった。おそらくは、図2の根底には、次のような状況、すなわち、英語不定詞の用法の集合が、日本語の連用形／infinitiveの用法の集合（「連用形／infinitiveの〔対応〕例」ではない）と、一部交わっている箇所がある、という状況を反映している可能性があると筆者は推測している。

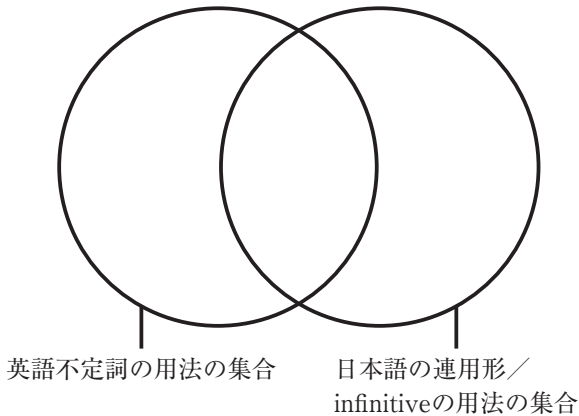


図3

とはいえ、すぐ上の図3に示された状態は、単に理論上推測されるものに過ぎず、本稿の中でより実証的に確認し終えたものは、先に見た図2によって示された状態である。

そのような状況のもとで、とにかくこのように日本語の連用形／infinitiveには英語の不定詞と同一視することができる要素と、同一視することができない要素とが混在しているということができる。

もし、日本語の連用形／infinitiveが英語の不定詞と同一視することがで

きるのであれば、上で見た、次の日本語・英語の形式は、言語普遍論の観点から本来、日英語間で共通していると考えられることのできる、同一の形式が日英語間の語順に関する類型論上の相違のために、実際には2つの異なる形式として具現化しているのであると解釈することができるかもしれない。

(28) 連用形による日本語連続動詞構文の一般形式：

動詞 1 + 動詞 2, ただし動詞 1 は infinitive. (= (12))

(29) 英語連続動詞類似構文の一般形式：

動詞 1 + 動詞 2, ただし動詞 2 は non-finite. (= (9))

しかしながら、上の図2が示すように、日本語の連用形／infinitiveと英語の不定詞は部分的に対応するものの、完全には対応しているとは言えない。そのようなことから、上記の解釈（すなわち、「言語普遍論の観点から本来、日英語間で共通していると考えられることのできる、同一の形式が日英語間の語順に関する類型論上の相違のために、実際には2つの異なる形式として具現化しているのである」とする解釈）は、少なくともそのままの形では支持することができない。とはいえ、他方において上の日英語にみられる2つの形式には間には、緩やかな類似性がみられることも否定し得ない。このことは、冒頭で触れた、英語が動詞連続を認めない言語であるのに対し、日本語が動詞連続を認める言語であるという、一部の論者に見られる言語類型論上の判断について、疑問の余地があることを示唆しているとみなすことも可能である。

10. 結 び

以上の議論を通して、本稿冒頭に掲げた「連続動詞構文が日本語、及び、英語に見られるのか、見られないのか、という問題を解明する」という目的について、現段階で示すことのできる、一定の見解を示唆すること

ができたのではないかと考える。

日本語動詞の連用形が英語の不定詞に対応する可能性があることに基づいて、「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」と「英語連続動詞類似構文の一般形式」を仮定し、両者の間にそれほど大きな違いが存在しないという可能性を検討した。そのために、英語の不定詞の主要な用法の各々に、日本語の連用形／infinitiveが対応するかどうかを分析した。そして、その結果として、日本語の連用形／infinitiveについて、英語不定詞と対応するといえる点と、対応していると言えない点が共存しているという状態であることを本稿は示した。

このことは、日本語における連続動詞構文が英語の連続動詞関連構文と共通した特性を持つ可能性があるものの、2つの言語が連続動詞構文に関係した特性を完全に共有していると断定することはできないということを示唆している。

日本語の連用形／infinitiveに特有の文法的振る舞いについて、さらに詳細な分析が必要であるという面が残されており、また他方において、英語の不定詞を、西洋語のより広い文脈の中で再確認するという作業などが残されている。これらの問題を含む、関連した諸課題についての分析、考察を、今後の課題として継続していくことが求められる。

参考文献

浅尾仁彦 (2009), 「動詞連続の文法的性質を捉え直す：日韓対照を通じて」.

関西言語学会第34回大会ワークショップ「複雑述語の形式・機能とダイナミズム」. 6月6-7日 (神戸松蔭女子大学) [pdf]

Declerck, Renaat (1991), *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Tokyo, Kaitakusha.

江川泰一郎 (1991), 『英文法解説－改訂三版－』, 東京, 金子書房.

郡司隆男 (2011), 「日本語はどんな言語か? : 類型論的観点からの日本」, 『Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin : トークス』, Vol.14, pp. 1-14. [2023年7月アクセス].

池田菜採子 (2013), 「B.Blochの活用論の成立：影響を与えた先駆者たち」,

- 『金城学院大学論集．人文科学編』, Vol. 9, No. 2, pp.170-201.
- Iwasaki, Shoichi (2013), *Japanese, Revised edition (London Oriental and African Language Library, 17)*, Amsterdam, John Benjamins Publishing Company.
- 小泉保 (2008), 『現代日本語文典』, 東京, 大学書林.
- Kuno, Susumu (1973), *The Structure of the Japanese Language*, Cambridge, MIT Press.
- Martin, Samuel (1975), *A Reference Grammar of Japanese*, New Haven, Yale University Press.
- Martin, Samuel (1987), *A Reference Grammar of Japanese*, Vermont and Tokyo, Turtle.
- 光原百合 (1990), 「下り訳の原理」, 『言語研究』, 日本言語学会, 1990巻97号, pp.177-178.
- 村田和久 (2013), 「 $v *P$ と $p *P$ の平行性」, 『大阪学院大学 外国語論集』, Vol. 66, pp. 45-67.
- Pullum, Geoffrey K. (1990), “Constraints on Intransitive Quasi-serial Verb Constructions in modern Colloquial English,” *Working Papers in Linguistics*, Vol. 39, pp. 218-239. Columbus, OH, The Ohio State University.
- Shibatani, Masayoshi (1990), *The Languages of Japan*, Cambridge, Cambridge University Press.
- 多胡友梨恵 (2010), 「移動動詞「行く」の直前に現れる「に」と「へ」の使い分けについて－1940年代、1950年代の文学作品から－」, 『思言 東京外国語大学記述言語学論集』, Vol. 6, 103-10
- 山田敏弘 (2004), 『国語教師が知っておきたい日本語文法』, 東京, くろしお出版.
- 国税庁「年の中途で法人成りをした場合の法定調書の提出」,
<https://www.nta.go.jp/law/shitsugi/hotei/1/03.htm>
[2023年10月アクセス].

同文館論争における保守派の再検討 －楊廷熙の上奏を中心に－

根 無 新太郎

A Re-examination of the Conservative Faction in the Tongwen Guan Controversy: Focus on Yang ting-xi's Report to the Throne

NENASHI SHINTARO

ABSTRACT

In the latter half of the nineteenth century during which there was a Qing dynasty movement to adopt Western learning, the Tongwen Guan (同文館) was established at the initiative of the Zongli Yamen (總理衙門). Although the Tongwen Guan was a language school, in 1866, the Zongli Yamen submitted a plan to create an affiliated institution known as the Tianwen suanxue Guan (天文算學館). The plan indicated that Tianwen suanxue Guan was to provide courses in astronomy and mathematics and its teaching staff was to consist of Westerners. The students admitted to the Tianwen suanxue Guan were to be government officials who passed the imperial examination. However, the submission of this plan embroiled Qing dynasty officials in a dispute.

Three people – Zhang sheng-zao (張盛藻), Wo ren (倭仁), and Yang ting-xi (楊廷熙) – have been named as the principal individuals who were opposed to the Zongli Yamen plan. The issue that unified their opposition was the idea that scholar-officials who studied Confucianism and passed the imperial examination should not learn about technical fields like astronomy and mathematics. This showed their obvious disdain for technology and technical specialists. Simultaneously, it also displayed their aversion to studying technical topics under Western teachers because they viewed Westerners as barbarians. Their disdain and aversion were based on

traditional Chinese values. In the previous research over the Tongwen Guan, the three dissenters who held these views were bundled together and discussed as the conservative faction that was contrasted with the modernization being striven for by the Zongli Yamen.

However, if one examines the views of each of these three individuals separately, one sees that both the emphasis of their arguments and their aims differ. Zhang sheng-zao had a clear disdain for technology, while the basis of Wo ren's view was hostility toward and an aversion to Westerners. The views of these two individuals were based on their standpoint as officials who passed the imperial examination.

On the contrary, although Yang ting-xi had disdain for technology and Westerners, his opinion that importance should be placed on appointing the best people to the most appropriate positions took precedence over this. The controversy evolved into criticism of the Qing dynasty, which did not appoint and utilize the best available people, and the circumstances that existed in China at the time.

In contrast to Zhang sheng-zao and Wen ro, who criticized the Tianwen suanxue Guan from a traditional stance, Yang ting-xi used criticism of the Tianwen suanxue Guan as a pretext for condemnation of the imperial court and the Zongli Yamen.

The differences between the views of these three individuals can be thought of as being due to their different statuses. Yang ting-xi was a "stand-by staff member" who had lost his post, while Zhang sheng-zao and Wo ren were bureaucrats of the imperial court. What lie behind his view was his discontent and dissatisfaction with his personal circumstances. However, in my discussion of Yang ting-xi's view, I will not simply consider his discontent. Rather, I will attempt to place his view in the context of the political structure of the Qing dynasty.

はじめに

19世紀半ば、アロー戦争に敗北した清朝では、1861年に外政機構に相当する総理衙門を設立した。総理衙門では皇族の恭親王が首班となり、主に軍事技術の面における西洋化を推進した。いわゆる洋務運動である。

この洋務運動の中に同文館の設置がある。同文館とは、1862年に総理衙門に附設されたもので「一種の外国語学校」であった¹⁾。やがて恭親王たちは、1866年には同文館に天文算学館という、天文学と算学を教える施設を附設することを建議した。しかし、この天文算学館の附設は、当時の朝廷内外に論争を引き起こした。それは、先の同文館への入学は八旗の子弟であったのに対し、天文算学館の入学者には「士」「正途」と称された科挙及第者が意図されたためである。

この同文館論争は清末中国における近代化の過程、すなわち洋務という近代化、西洋化に対する伝統、保守の抵抗といった文脈において、これまでに論じられてきた。そして、こうした保守派は「頑固派」とも言われてきた²⁾。そこでは同文館論争は当時の中国社会の実態を表すものとして捉えられてきた。すなわち、伝統的な科挙官僚が上位、体制内にあり、洋務の実践を担う者とされた実務家や技術者が下位、体制の埒外に位置するものである³⁾。

後に本稿でも述べるように、筆者もこうした先学の見方からは大きな示唆を得、また大体において考えを同じくするものである。ところで同文館論争において、総理衙門の建議に反対を行った主な者として張盛藻、倭仁、楊廷熙の三名が挙げられる。だが先述のように、これまで同文館論争

1) 坂野正高『近代中国政治外交史－ヴァスコ・ダ・ガマから五四運動まで－』東京大学出版会、1982年第2刷、300頁。

2) 例えば、坂野、前掲書、300～301頁、大竹鑑「清末の教育－洋務と教育－」『大谷學報』48巻第3号、1969年、熊月之『西学東漸与晚清社会（修訂版）』中国人民大学出版社、2011年、第6章、李欣然「争于廟堂的道器与中西－同治5、6年間の天文算学館之争」『社会科学研究』2015年第4期、182頁を参照。

3) 当時の清朝における技術、実務への蔑視については岡本隆司「『洋務』・外交・李鴻章」『現代中国研究』第20号、2007年を参照。

は伝統と近代の対立、保守派の抵抗といった文脈から論じられてきた。そのため、これら三名の反対意見について強調されてきたのは、伝統的な科挙官僚が近代化をどのように見、抵抗を行ったかという点であった。そして、その際にはこれら三名の反対派はひとしなみに論じられ、個別の検討が十分に行われてきたとは言い難い⁴⁾。

だが、詳細は本稿で述べるが、この三名、特に張盛藻と倭仁の二者と楊廷熙の間には地位や論点などにおいて相違があった。例えば、官僚としての地位がそれぞれに異なる。張盛藻と倭仁は朝廷内の官僚として直接に自己の意見を述べた者であるが、楊廷熙は朝廷の外にあり、代奏という形式によってのみ自己の意見を述べ得た。当然のことながら、その地位は前二者に比べて極めて低い。また、共通する部分があるものの、楊廷熙の上奏においては張盛藻と倭仁が述べたこと以外の論点に多く紙幅が割かれている。

そこで本稿では、楊廷熙の上奏を中心にしながら、この三名の意見について、その視点の共通点や相違を踏まえながら検討していく。そして、同文館論争において反対派、保守派と呼ばれた者たちがどのような個々の問題意識の下で意見を述べたのかを探っていく。併せて、それらを改めて清末の政治上の文脈に位置づけることとしたい。また、このような反対派、保守派とされた者たちの再検討を行うことは、清末中国の動向を伝統、或いは近代化といった二項対立的に捉える視座への再検討につながるものと考えられる。

4) 反対派を個別に論じたものとして、例えば李細珠『晚清保守思想的原型－倭仁研究』社会科学文献出版社、2000年がある。しかし李細珠氏においても、近代化を推進する「洋務派」とそれに反対する「守旧勢力」「社会的排外主義的民族情緒（186頁）」の争いとして同文館論争を捉え、それを表す人物として倭仁を描いている（李細珠、前掲書、183、186頁）。また、李欣然、前掲論文は、「道」「器」の概念から反対論者三名について論じている。しかし、やはりその視点は伝統と近代の対立にあるものといえる。このような視点から反対派の再評価を行っているものとして、ほかに潘振泰「清季「天文算學館」籌設爭議中的保守性思想分析」『國立政治大學歷史學報』第33期、2010年がある。

第1章 朝廷内における論争

本章では、まず同文館論争について先学の成果に依拠しながら、朝廷内における動向を述べていきたい⁵⁾。

同文館の設立から4年あまり後の1866年末に、総理衙門は「因って思ふに洋人の機器・火器等件を製造、^お及び行船・行軍するに、一として天文・算學中より來らざる無し」と述べ、「一館を添設」することを上奏した。そして、この新設の部署には「滿漢の舉人及び恩・拔・歲・副・優貢」並びに「…正途出身の五品以下の滿漢京外各官」を入学させ、西洋人を招聘し、その下で彼らを学ばせるよう具申した。すなわち、西洋人の軍事技術の基礎には天文学と数学があるとし、それを学ぶための部署を同文館に附設し、正途出身者、いわゆる「士」の入学を求めたのであった⁶⁾。

この上奏はただちに裁可された⁷⁾。これを受け、翌1867年1月末に総理衙門は再度上奏を行った⁸⁾。そこでは、総理衙門は天文算學館を附設する

- 5) 同文館論争については、前掲注2と注4を参照。また箱田恵子『外交官の誕生 近代中国の対外態勢の変容と在外公館』名古屋大学出版会、2012年、163～165頁も併せ参照。
- 6) 中國史學會主編『洋務運動(2)』上海人民出版社、1961年、22～23頁「同治5年11月初5日總理各國事務奕訢等摺」。尚、「舉人」とは科挙の第一段階である鄉試に及第した者に与えられる称号である。また、「恩・拔・歲・副・優貢」は貢生と称されるものの種類である。貢生は生員（秀才とも称される、地方の府学、州学、県学の学生。鄉試に応じる資格を有する）から選ばれて中央の国子監に送られる。大体において、これら挙人と貢生、更に進士（科挙の最終段階である殿試に及第した者）、監生（国子監本来の在學生）、廩生（高官の子弟）、保舉（総督、巡撫等による推薦）により官僚となった者を正途出身の官僚とみなす。一方、廩監生（父祖の功績が十分ではなく、一旦、国子監に送られる者）、算學生（後掲注15参照）、胥吏（後掲注35を参照）、捐納（後掲注33を参照）は雑途出身とされ、正途出身者とは厳格に差別された。（宮崎市定『科挙史』平凡社、1987年、194～196、200～224頁、近藤秀樹「清代の捐納と官僚社会の終末（上）」『史林』第46巻2号、1963年、87～91頁）。
- 7) 中華書局編輯部・李書源整理『籌辦夷務始末（同治朝）』中華書局、2008年（以下『夷務』）、巻46〔1615〕「奕訢等奏擬設館學習天文算學摺」同治5年11月庚申。
- 8) 『洋務運動(2)』23～27頁「同治5年12月23日總理各國事務奕訢等摺」。『夷務』巻46〔1650〕「奕訢等奏酌擬學習天文算學章程呈覽摺」〔1651〕「同文館學習天文算學章程六條」同治5年12月戊申。同文館論争における上奏や上諭は、大体において『洋務

意義や理由、詳細な章程を述べている⁹⁾。本上奏については、後述の楊廷熙による上奏がこれに反駁する形で行われているため、楊廷熙の上奏を論じる中で改めて触れる。だが、本章で述べる張盛藻や倭仁の上奏もこの上奏に対する反論であるため、本章においてもその概略を述べておきたい。

この上奏の骨子は、富国強兵のために天文学や数学を学ぶことの重要性を指摘し、今後に起こるであろう反対論を予想し、それへの反駁をあらかじめ行うことにあった。そこで「若し夫れ西人に師法するを以て恥と爲す者あれば、其の説尤も謬りならん、夫れ天下の恥、人に若かざるより恥なる莫し」と、天下の恥とは人に及ばないことだと述べて、同時代の日本を例としつつ、西洋人からそれらを学ぶことの重要性、切迫性を訴えている¹⁰⁾。また、左宗棠や李鴻章といった督撫による地方での西洋人の雇用と工場の創設に触れ、更に天文や数学は「其の實、法は固より中國の法なり」と、元来は中国由来の学問であったとも述べている。

そして本上奏において、総理衙門が特に注意したものが「或ひは謂へらく製造乃ち工匠の事なれば、儒者之を爲すを屑いさぎよしとせず」とするような反対意見であった。この反対意見は、当時の中国社会における「儒者」と「工匠」、すなわち「士」と「庶」の厳然たる区別、「人を治めるものは、物を作らないという中国においては普通の觀念」¹¹⁾を示すものであった。

そのため、こうした反対意見を総理衙門は特に危惧し、「臣等尤も説有り」と、『周礼』『考工記』を引用し「今日の學、其の理を學ぶなり、乃ち儒者の格物致知の事なれば、並へて學士大夫に強ひるに親しく藝事を執るを以てするに非ず」と、決して「士」を製造に携わらせることを強制したものではない、との説明を行っている¹²⁾。

運動(2)』と『籌辦夷務始末』に重複して収録されている。『洋務運動(2)』が軍機処檔案からの収録とされているため(中國史學會主編『洋務運動(1)』上海人民出版社、1961年、序例)、本稿では『洋務運動(2)』を底本とし、異同については適宜記述する。

- 9) 本上奏に関しては、すでに大竹、前掲論文、35～37頁において要点部分の書き下しと説明が行われている。本稿においてもこれを参考にした。
- 10) この日本への論及については佐々木揚『清末中国における日本観と西洋観』東京大学出版会、2000年、13～14頁も参照。
- 11) 大竹、前掲論文、36頁。
- 12) 大竹はこれを「技術を使用することと理論の研究と區別して論じた」としている(大竹、前掲論文、37頁)。

更に、総理衙門は「學問素より優れ、差使較や簡たれば、若し此の項に天文・算學を學習せしむれば、程功必ず易からん」等と述べ、翰林院編修、檢討、庶吉士、また「進士出身の五品以下の京外各官」をも天文算學館に入館させることを提案した。すなわち、先の挙人や五貢から、身分が更に上位に位置する翰林院編修、檢討、庶吉士や進士出身者へと入館者の範囲が拡大されたのであった¹³⁾。同時に、章程において総理衙門はこれらの天文算學館への入館者に対し、手厚い給与の支給と学習後の優遇を取り決めている。

この総理衙門の上奏と章程は裁可されたものの、やがて1867年3月初旬には総理衙門の危惧したような反対意見が上奏される。それは掌山東道監察御史の張盛藻によって行われた¹⁴⁾。

張盛藻の反対意見の中核にあるものは、まさしく総理衙門が危惧した、「士」の在り方をめぐるものであった。上奏において張盛藻は「臣愚以爲へらく朝廷の命官するに必ず科甲正途を用ふるは、其の孔孟の書を読み、堯舜の道を學び、明體達用、規模宏遠とならんが爲なり、何ぞ必ず其れをして機巧を習爲し、輪船・洋槍を製造するの理を專明ならしむるや」と述べた。「孔孟の書」と「堯舜の道」を學ぶ「士」が、なぜ蒸氣船や洋式火器の製造などを學ばねばならないのか、と疑義を呈したのである。

また、張盛藻は「臣以爲へらく專館を設立するに、祇だ宜しく欽天監衙門に責成して年少穎悟の天文生・算學生を考取し、送館學習し、西法と中法もて互相ひに考驗せしむるべし。輪船・洋槍に至りては、則ち宜しく工部に精巧の工匠或ひは軍營武弁の心計有る者を遴選し、其れをして専心演習し、其の法を傳受せしむるべきなれば、必ずしも科甲正途の官員を用ひ

13) 翰林院とは「貯才の地」とよばれたもので、将来を約束された若手英才官僚をプールしておく部署であった。坂野、前掲書、26頁ではこれを「いうなれば、天子直属の秘書室」としている。また、岡本隆司『曾國藩「英雄」と中国史』岩波書店、2022年、33～34、36、43頁も参照。

14) 『洋務運動(2)』28～29頁「同治6年正月29日掌山東道監察御史張盛藻摺」。張盛藻の上奏は先の総理衙門の上奏と同様に、その書き下しと概略が大竹、前掲論文、37～38頁にある。本稿もこれを参考にした。また、張盛藻著 周德富・金華校注『張盛藻集』華中師範大学出版社、2017年、267～270頁も語釈などの解説を行っている。

て其の事を肄習せしめ、以て士氣を養ひて責成を専らにせず」と代替案を述べている。まず、天文算学館には欽天監より若年で聡明な者を選んで派遣させることが提案されている¹⁵⁾。そして蒸気船や洋式火器の製造については、工部から「工匠」や軍中から物分かりの良い下級武官を選び、彼らに学ばせれば、科举官僚を用いるまでもない、というのである。ここに表されているのは、軍事技術、武器製造への蔑視であり、故にそれらに従事する者は下等だとする、厳正な秩序観の下での「士」の尊厳である¹⁶⁾。

だが、天文算学館をめぐる議論は、張盛藻の意図したものとはならなかった。朝廷はただちに上論を発し、張盛藻の上奏を斥けた¹⁷⁾。

15) 欽天監とは暦の制作、天文、気象観測を担当する官庁であった（臨時臺灣舊慣調査會『清國行政法（第1巻上）』汲古書院、1972年復刻版、278～279頁）。尚、この欽天監での奉職を目的として養成されていた者が算学生である。これは前掲注6において述べたように雑途とみなされていた。つまり、張盛藻は天文算学館への入館者を雑途に限定しようというのである。

16) こうした考えを如実に示した者として劉錫鴻が挙げられる。劉錫鴻は挙人で駐英副公使（1872～1877）、駐独公使（1877～1878）を歴任した。その劉錫鴻はイギリスで次のように語っている。「電學者…熱學者…天文學者…氣學者…光學說見前。…惟力學・化學、尚未及睹。此皆英人所謂實學…中國士大夫惑溺其說者、往往附和之。余爲之辯曰、彼之實學、皆雜技之小者。其用可製一器、而量有所限者也。子夏曰、雖小道、必有可觀者焉、致遠恐泥、君子不爲。非即謂此乎。…今西洋之俗、以濟貧拯難爲美舉、是即仁之一端、以仗義守信爲要圖、是即義之一端。…藹藹乎、秩秩乎、雍穆整齊、不因好勝而奮爭心、不恣貪欲而動殺機、生靈之禍、即於是乎息。非然者、一意講求雜技、使趨利之舟車・殺人之火器、爭多競巧、以爲富強、遽謂爲有用之實學哉。中國自天開地辟以來、歷年最多、百數十大聖繼起其間、製作日加精備、其言理之深、有過於外洋數倍者。外洋以富爲富、中國以不貪得爲富。外洋以強爲強、中國以不好勝爲強。此其理非可驟語而明。究其禁奇技以防亂萌、揭仁義以立治本、道固萬世而不可易。彼之以爲無用者、殆無用之大用也夫」（劉錫鴻 朱純校点『英軺私記』湖南人民出版社、1981年、107～110頁）。尚、岡本隆司「華夏と夷狄—劉錫鴻『英軺私記』」岡本隆司・箱田恵子・青山治世『出使日記の時代 清末の中国と外交』名古屋大学出版会、2014年を併せて参照。また、劉錫鴻は「如必欲用機器以壯軍心、可令教操洋人代爲購辦、不必開局自製、不必派官採買、以期得實用而省費、洋販鉅贖固不擇人而售也…若開局自製、則工匠必將私賣以圖利…害已不淺、況又廣募人學習機器、輾轉相教、機器必滿天下、其以此與官軍對壘者、恐不待滋事之洋匪也…故仁義忠信可遍令人習之、機巧軍械萬不可多令人習之也」（『劉光祿遺稿』卷2「讀郭廉使論時事書偶筆」13頁）とも述べ、武器製造や軍事技術者に対する蔑視と不信を表明している。

17) 『穆宗實錄』卷195、35頁、同治6年正月甲申条。

こうして、総理衙門の意向通りに天文算学館が附設されるかに見えた直後の1867年3月20日に、大学士倭仁による上奏が行われた¹⁸⁾。倭仁は、朝廷が張盛藻の上奏を却下したことを受けて上奏を行った。こうしたいきさつからも分かるように、彼の上奏は天文算学館への科学官僚の入学に反対、撤回を求めるために行われたものである。

3月20日に行った上奏において、倭仁は「天文・算學の益爲るは甚だ微なりて、西人の正途を教習するは、損ずる所甚だ大」であるという¹⁹⁾。そして、「禮義を尚びて權謀を尚ばず、根本の圖、人心に在りて技藝に在らず」と述べるほか、「…學者誠學するも、成就する所は術數の士に過ぎず、古今來未だ術數を恃みて能く衰を起こし弱を振する者有るを聞かず」とも述べているように、倭仁においても、その根底にはやはり技術への蔑視がある。

ただ、倭仁が反対上奏において特に強調しているのは、「…夷人は吾仇なり、咸豐十年、稱兵犯順し…此れ我朝二百年未だ有らざるの辱」「議和以來、耶穌の教へ盛行となり、無識の愚民、半ば爲に煽惑せられ、恃む所の讀書の士、義理を講明せば、或ひは人心を維持すべし」といった、1860年のアロー戦争での敗北、その結果として齎されたキリスト教の布教が人心を乱していることへの反感であった。

これに対して総理衙門はただちに反論を行った。この後、数度に亘って倭仁と総理衙門は上奏を行い、論戦を繰り返した。この両者のやり取りについては、すでに先学による論及があるため、本稿においては紙幅の都合もあり、改めて論じることはしない²⁰⁾。

ただ、先の張盛藻の時とは異なり、総理衙門が倭仁の上奏に対し反論を重ねたのは「該大學士久しく理學に盛名を著はさば、此の論出でて學士大夫從ひて之に和する者必ず衆し」という理由からであった²¹⁾。また、総理

18) 倭仁は蒙古正紅旗に属する旗人である。その思想は「朱子学原理主義者というべき」ものであったが、学者として著名であり、時の皇帝、同治帝の師傅であった（岡本、前掲『曾國藩』164頁）。伝記については『清史稿』卷391、列伝178を参照。

19) 『洋務運動(2)』30～31頁「同治6年2月15日大學士倭仁摺」。

20) 李細珠、前掲書、169～173頁。大竹、前掲論文、38～40頁。

21) 『洋務運動(2)』31～33頁「同治6年3月初2日總理各國事務奕訢等摺」。

衙門は論争の中で「御史張盛藻の此事を條奏し、明らかに論旨を奉ずるの後に当たりて、臣衙門に投考せる者尚人に乏しからざるも、倭仁倡議より以來、京師各省の士大夫黨を聚めて私かに議し、法を約して阻攔し、甚且だしきは無稽の謠言を以て人心を煽惑せば、臣衙門遂に復た投考する者有る無し。是れ臣等未だ人心を失するの道に有らず、人心の失するは、浮言を倡へる者の之を失するなり。…今人心既に浮言の搖すぶる所と爲れば、臣等勉強するに従^よし無し」とも述べている。このように天文算学館への志願者が、倭仁の上奏を契機として動揺、激減したことを恐れた総理衙門は、急遽、現段階での志願者の選抜を行う意向を示している²²⁾。

だが、結果として朝廷は総理衙門を支持し、却って倭仁を揶揄、批判する上諭を下した²³⁾。これにより、同文館論争において反対派の敗北が決定的となったのである²⁴⁾。

第2章 楊廷熙

前章で見たように、同文館論争では倭仁らの反対意見が斥けられた。天文算学館を附設することへの朝廷の決意は相当なものであったといえる。だが、実際にはこれで反対意見が止むことはなかった。

折しも、首都北京が位置する直隸省では深刻な干ばつが起こっていた²⁵⁾。これを背景として、論争からおおよそ2ヵ月後の1867年6月中旬に内閣侍讀學士鍾佩賢が上奏を行った。鍾佩賢の上奏は干ばつを天譴と見做し、同治帝やその母、西太后に修身、反省のために直言を広く募るよう求めたものであった。その中で鍾佩賢は論争に触れ、「倭仁の同文館を設くるを諫するや、論旨もて數人を酌保して另に一館を立て以て之を難きとせしむ…羣情遂に疑惑無しとせず…誠に恐らくは敢言の氣此れより沮まれ、

22) 『洋務運動(2)』35～36頁「同治6年3月19日總理各國事務奕訢等摺」。

23) 『穆宗實錄』卷199、9～10頁、同治6年3月癸酉、乙亥条。

24) 上諭による裁定では倭仁の敗北といえるが、倭仁の反対によって天文算学館に入る者は減少した。そのため、天文算学館は「名存實亡」となったという(李細珠、前掲書、173頁)。

25) この干ばつについては、『穆宗實錄』卷203、7～8頁、同治6年5月丙寅条を参照。

唯阿の習此れより開かる、此れ臣の大いに慮^{うれ}ふる所なり」と述べている²⁶⁾。朝廷が倭仁に辛辣な上諭を下した結果として、諫言を行う者がいなくなり、阿諛追従のみが行われるようになったというのである。

このような鍾佩賢の上奏に対し、朝廷は「尚ほ未だ深く悉^しらず」や「並^たへて未だ其の難きとする所を強ひず」等と述べる一方で、忌憚のない意見を官僚たちに求めた²⁷⁾。

こうした朝廷の求めに応じたのが楊廷熙である。楊廷熙自身の経歴については不明な部分が多いものの、官職については保举（推薦）によって遇缺即選直隸州知州となったことが分かっている。これは知州ポストに空きが生じれば任官することができるもので、いわば待機人員であった。このように身分の低い「微員」であったため、楊廷熙の上奏は直接に行われたものではなく、都察院による代奏を経て行われた²⁸⁾。前章で見た張盛藻や倭仁が朝廷内の官僚であったのに対し、楊廷熙は朝廷の外にあった者といえる。

この楊廷熙の上奏は極めて長文だが、その視点には独特な部分もあるため、やや冗長だが本章ではこの上奏の概略を述べてみたい²⁹⁾。その際には、前章と重複する部分もあるが、楊廷熙が非難のために引用した前掲の総理衙門の上奏（1867年1月末）に照らして見ていくこととする。

楊廷熙は上奏の冒頭で、同文館の設置という「時政の失」「禦夷失策の

26) 『同治中興京外奏議約編』巻1、6～7頁「請飭廷臣直諫疏」。李細珠、前掲書、172頁。

27) 『穆宗實錄』巻203、11～13頁、同治6年5月戊辰条。

28) 楊廷熙の上奏を代奏した都察院によると「籍隸四川瀘州、由教諭保舉遇缺即選直隸州知州」とある（『洋務運動(2)』42～43頁「同治6年5月29日都察院左都御史靈桂等摺」）。尚、清朝における上奏は形式やそれを行うことが可能な身分など、厳格に定められていた。そのため、楊廷熙は代奏という形式に拠らざるを得なかったのである。例えば、黨武彦「清代檔案史料論序説—乾隆期の日本人漂流民送還関係軍機處録副奏摺を素材として」『東京大学史料編纂所研究紀要』第13号、2003年、152頁を参照。

29) 楊廷熙の上奏は『洋務運動(2)』43～50頁「同治6年5月22日楊廷熙條」。尚、前掲注8で述べたように、この上奏は『籌辦夷務始末』に採録されているが（『夷務』巻49〔1732〕「楊廷熙摺」同治6年5月辛巳）、『洋務運動(2)』と『夷務』では若干の異同がある。これについては後掲注31、32を参照。

致す所」が干ばつをもたらしたと指弾する。そして「臣以爲へらく同文館の議、或ひは中止すべし」と同文館の廃止を求めた。その根底には「自來奇技淫巧、衰世の爲す所」と述べるような、技術への蔑視がある。こうした点は先の張盛藻や倭仁と同様だが、更に楊廷熙は総理衙門の上奏に対し「不可解なる者」として、10カ条の非難を行っている。

まず、前章でも触れたような西洋人を師とすることが恥ではなく、人に及ばないことが天下の恥だとして発奮を促した総理衙門に対し、楊廷熙は「不解者一」として反論する。そして、中国にとっての最大の恥とは、中国で西洋が毒を流し続け、西洋人が乱を起こすことだと述べる。アヘン戦争やアロー戦争による敗北を列挙し、これらに対する報復こそが「天下を激勵」できるものだと指摘した上で、「…今日共に天を戴かざるの讎を恥とせず、星宿を知らざるの士を羞とす、何ぞ大恥を忘れて小恥に務めるや」と結んでいる。

次に楊廷熙が「不解者二」とするものは、総理衙門が「西人製器の法、度数よりして生じざるは無し」「其の法本中國の法なるも、特に西人縝密にして、運思に善し」と述べたことに対するものである。総理衙門は、数学が西洋人の機械・兵器製造の根本であることや、その数学や天文については、本来は中国から起こったものだが、現在では特に西洋人が緻密な運用を行っているとする。

これに楊廷熙は「意ふに以て天文數學に深明なるは西人に過ぐる無しと爲すは、此れ又見る所の廣からざるなり」と述べている。楊廷熙は渾天儀などの中国古来の天文、数学の装置や書物を挙げ、西洋に勝るとも劣らないものだとする。また、康熙から乾隆にかけての徐文靖の『山河兩戎考』や胡煦の『周易函書』といった天文や数学に関する書物を挙げ、それらにこそ学ぶべきだとする³⁰⁾。

また、総理衙門が「輪船機器を製造するに、苟も西士に藉して先導と爲し、機巧の原・製作の本を講明せしむるにあらざれば、竊かに恐らくは師心自用となり、徒らに錢糧を費やさん^{いたづ}」と述べたこと、つまり、蒸気船を

30) 徐文靖については『清史稿』巻485、列伝272、胡煦については『清史稿』巻290、列伝77を参照。

始めとする機器の製造に関し、西洋人を師とするのでなければ資金の空費に終わるとの懸念を、楊廷熙は「不解者三」として「意ふに必ず輪船機器を以て西洋の恃みて以て中國に制勝するの具と爲し、亦た輪船を用ひて以て輪船に敵し、機器もて以て機器を禦ぐ、其れ策の尤も非なり」と反論している。

では、西洋の蒸気船や機器に対抗するために中国は何を頼みとするべきなのか。ここで楊廷熙は「夫れ利器有るは、其の事を善くするの工有りて器始めて利となり、事を善くするの工有るも、善く用ふるの人無くば、其の器利とならざるに在り。即ひ善く用ふるの人有るも、人の焉に能く之を破るに遇はば、其の器仍ほ利とならず」と論じる。機械や兵器といった技術などよりも、人材こそが重要だというのである。

このような技術よりも人材の重視は、次の「不解者四」において更に展開される。「不解者四」は、総理衙門が「論者察せず、必ず臣等を以て不急の務めと爲さん」と述べたことへの反論である。総理衙門は、天文算学館の附設を「不急の務め」として反対する者たちを批判した。

これに対し、楊廷熙は「…此の時當務の急爲るは、天文に在らずして人事に在り、算術機巧に在らずして政治の修明に在り」と反論している。

また、総理衙門が「不急」ということに続けて「中國の宜しく自強を謀るべきこと、今に至りて已に亟かなり」と述べ、自強こそが急務だとした点に対し、楊廷熙は「不解者五」として「夫れ自強の道、豈に天文・算數・輪船・機器に在るや」と疑義を呈する。その上で「至誠無息の令主」と「各の其の職を盡くすの臣工」が揃ってさえあれば、天下は恐れ懷き「蠻夷」でさえ服従するだろうと述べる。ここにおいても、先の「不解者三」と「不解者四」と同様に、技術などより人材を重視する姿勢が貫かれている。

その最も重要であるはずの人材について、総理衙門が「翰林・進士・五項の正途の京外官員を招取して考試もて錄取し、西人を延聘して在館の教習とす」と定めたことを「不解者六」において批判する。これは前章でも述べたように、総理衙門が正途出身者を選抜し、天文算学館において西洋人の下で学ばせようとしたものである。

まさに天文算学館附設の骨子ともいえるべきものだが、楊廷熙は「此れ尤

も大ひに風教を傷つく」として反対を表明している。その理由は西洋人が「敵國」「世讎」であるためだが、同時に「…即ひ多材多藝の層出すること不窮なるも、華夷の辨嚴ならざるを得ず、尊卑の分定まらざるを得ず…」という華夷思想が表明されている。

このように「夷」であり「卑」である西洋人から正途出身者が教えを受けるなどとなれば、籠絡されて「…忠義の氣此れより消え、廉恥の道此れより喪ひ、機械變詐の行此れより起こる」となるに違いない、と楊廷熙は危惧しているのである。

こうした正途出身者たち、いわゆる「士」に西洋人が教授を行うこと、特にその内容が製造や技術であったことについて、楊廷熙は以下の「不解者七」と「不解者八」において批判を加えている。

まず「不解者七」は、総理衙門の「西洋各國輪船の製を講求するに、^た互相ひに師法とし、制作日に新たとなれば、雇買し以て其の用に應ずれば、計は便なりと雖も法は終に人に在り、講求し以て其の源を得れば、法は既に明らかにして用は將に我に在らんとす、因て同文館を開設す」という意見への反駁である。これは、西洋から蒸気船を購入する方が簡便であるが、結局はその製造方法を理解すれば、十分に活用することができる、とした意見である。

これを楊廷熙は「知らずや其の計亦た^{もと}左り、其の謀も亦た^{つたな}拙きを」と批判する。楊廷熙は、蒸気船や機械・兵器などは西洋人が中国から利を貪るための手段であるため、その製造方法の核心を教えることは決してない。西洋人がたとえ教えたとしても、防御や攻略の方法については教えるだろうか、と問う。

楊廷熙は続けて、将来、科学官僚が「工匠」に技術を教授し、海や川の水勢や浅深、蒸気船の運用方法などを「水手」に教える、このような労力を費やして果たして成功できるのだろうか、と疑義を呈する。そして、「知るべし天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かずを」と結んでいるが、この議論の前提にあるものは、科学の及第者である「士」と、「工匠」「水手」といった「庶」との差別である。

こうした「士」と「庶」の差別は、次の「不解者八」において更に強調

される。総理衙門は「李鴻章・左宗棠等皆能く其の理に深明にして、其の説を堅持し、或ひは藝局を設け、或ひは機器局を設け、兵弁と少年子弟を揀派し、洋人を延請し、教へるに語言・文字・算法・畫法を以てし、以て將來輪船機器を造るの本と爲す。此れより以て觀るに、是れ西學の急ぎ肄習を爲さざるべからず」と上奏で述べた。これは、当時、地方督撫であった左宗棠や李鴻章が兵器製造のために、その所轄地域に「藝局」や「機器局」といった西洋式の軍需工場を設置し、「兵弁（兵士と下級武官）」や少年子弟を派遣して西洋人による言語、文字、算術、製図の教育を行っていたことに触れたものである。当然のことながら、総理衙門はこれら地方督撫の試みを模倣すべきものとして挙げている。

だが、楊廷熙はこうした西洋式軍需工場の設置について「疆臣の之を行ふは則ち可なるも、皇上の之を行ふは則ち不可なり」とする。また、西洋人からの言語等の教授については「兵弁の少年・子弟の之を學ぶは猶ほ可なるも、科甲官員の之を學ぶは斷じて不可なり」と言明する。この理由について、楊廷熙は「疆臣の制作、信從するは一省一時に過ぎず、朝廷の詔令、遵守するは則ち天下萬世に在り。兵弁の子弟の之を學ぶは、其の藝事を成すに過ぎず、科甲の官員の之を學ぶは、即ち風俗を寢成すべし。蓋し科甲の官員、四民の瞻仰し、天下の崇奉する所の者なり」と述べる。ここでは「制作」と「詔令」、「兵弁の少年・子弟」と「科甲の官員」、「藝事を成す」と「風俗を寢成す」がそれぞれ対句表現となり、前者は「庶」の、後者が「士」の範疇に相当するものである。同時に、前者は軍事技術、兵器製造に関連したもので、「瞻仰」や「崇奉」の対象とは決してなりえないものであった。

また、「士」に対し「夷」である西洋人が教授を行うことがあってはならないとは、これまでも述べられてきたことであった。だが、ここでは更にキリスト教にも論及されている。すなわち、西洋人の下で学習した、若い科挙官僚がおよそ20年後に朝廷の大臣や地方督撫に昇進した際には「皆惟だ教へのみ是れ従ひ、惟だ命のみ是れ聽く」ことになるだろう、また「…恐らくは天下の人、科甲尚且つ學習するに因って、遂に相習ひて風と成す」と述べ、「士」が「瞻仰」や「崇奉」の対象となるからこそその危惧

を表明している。そして、やがて行いのよろしくない者、愚かな者、ならず者たちが天文・算学の学習を名目に群れを成し、西洋人と共に騒動を起こすかもしれないと言う。

そして最後に、楊廷熙は「不解者九」と「不解者十」において、同文館の制度と総理衙門自体に対して批判の矛先を向ける。

総理衙門は同文館への志願者を増加させるため、「事は創始に屬さば、立法宜しく詳なるべし、課程を嚴にせんと欲さば、必ず須らく廩餼を優給し、鼓舞を期さんと欲さば、必ず當に升途を量り予ふべし」との要請を行った。つまり、同文館学生への給与と昇進における優遇を定めようとしたのであった。

このような優遇に対し、楊廷熙は「竊かに思ふに賞罰は天下を驅策するの大柄爲れば、賞罰宜しく公たるべし、祿養宜しく厚たるべし、豈に僅かに同文館一處に之を行ふや」と反対を表明している。この背景には、反乱が続発する中で「…軍士の飢譁^{しばし}屢ば告げられ、京外大小官員の廉俸裁撤せられ、未だ増加を見ず、公に従ひ枵腹」しているといった文武官の困窮があった³¹⁾。

次に「不解十」とされたのは、総理衙門が「外人の物議多しと雖も、當局の權衡宜しく定まるべきなれば、臣等此に之を籌すること熟なり」と述べたことに対してであった³²⁾。これは、局外者が喧しくなることを仄めかし、それに惑わないようにされたい、と朝廷に求めたもので、先の張盛藻や倭仁、そして楊廷熙などによる反対を見越したものと言えよう。

これに対し、楊廷熙は「此の言尤も己見に偏執し、專擅挾持し、皇上に啓くに拒諫飾非の漸を以てするに屬す」と強く反発した。そして、従来、清朝では制度や官職の変更などについては廷臣會議を開催し、その結論を受けた後の施行であったことを挙げ、「所以に專擅の諸弊無し」と指摘す

31) 『洋務運動(2)』においては「軍士譏諍屢告」とあるが、『夷務』では「譏」を「飢」に作っている。意味の上から「飢」が妥当と考えられるため、本稿ではこの部分を『夷務』に依拠した。

32) 『洋務運動(2)』では「外人之物議雖多」とあるが、『夷務』では「物議」が「疑義」と改められている。

る。

しかしながら、楊廷熙の見た同文館論争の際の総理衙門の態度は、まさしくそれらに違背するものでしかなかった。科举官僚を「夷狄」の下で学ばせようとする「重大事件」について「豈に總理衙門數人の私見もて遂に能く決然と之を行ひて弊無からんや」と批判する。そして、総理衙門が敢えてこのような「天理」や「人心」、「衆論」に悖る行いをし、「夷夏の防」を破壊しようとしていることは、楊廷熙にとって理解し難い暴挙であった。

第3章 「微員」のまなざし

前章で述べたように、楊廷熙は総理衙門の上奏に対して10カ条にも及ぶ長大な批判、反論を行った。その中には西洋人を「夷狄」とし、アヘン戦争以来の報復を求めた攘夷、華夷思想がある。また、技術、特に軍事技術への蔑視があり、それらを「士」が学び、従事することへの拒絶もあった。だが、これらは先に張盛藻や倭仁においても述べられ、朝廷が厳しく斥けたものであった。たとえ楊廷熙が朝廷に翻意を求めようとも、容易ではなかったと思われる。では、楊廷熙が上記の点と共に朝廷に述べようとしたこと、楊廷熙独自の視点、換言すれば、張盛藻や倭仁が殊更述べる必要がなく、楊廷熙であればこそ表明する必要があったものとは何だったのだろうか。本章ではそれについて述べていきたい。

ここで10カ条を改めて見ると、上述の点以外に繰り返し述べられているものがある。それは人材登用についてである。前章で述べたように、「不解者三」、「不解者四」、「不解者五」が、それらを強調したものといえる。

こうした人材登用を論じる前提として、楊廷熙は「…中國は人材の淵藪爲り（不解者二）」と中国における人材の豊富さを誇示する。では、このように豊富な人材を擁する中国において、西洋人が横行するような事態となったのは何故か。これについては「何ぞ康熙の時に西洋輪船數隻の岸に近づくを准さず、彼即ちに俯首聽命し、敢へて内地に一步を入れざるや。道光・咸豐に及び、沿海の將帥督撫、開門揖盜し、内廷の大臣は耳を以て目と爲し、先づ畏憚の心を存し、旨を請ひて屢ば寛容を示すに、彼愈よ兇

餓を張る（不解者三）」とされている。ここでは、中国の現状を招いたのは「沿海の將帥督撫」と「内廷の大臣」といった朝廷内外の当局者たちだとしている。

ここに至って、人材登用から現状批判へと議論は転化していく。

特に「内廷の大臣」や吏部、戸部、兵部、工部といった各官庁に対しては、その無策を指摘している（不解者五）。だが、楊廷熙が特に批判の矛先を向けたのは、これら朝廷内部の無策以外に、賞罰などの人事における不公正、不公平であった。

朝廷に対し、楊廷熙は「朝廷急ぎ宜しく憂ひ勤めて^{おそ}惕^{はげ}れ厲み、其の神武を奮ひ、或ひは旁らは招き遠くは詔し、天下の人才を求め、或ひは博く訪れ周く咨り、民間の疾苦を知るべし。近くは樞密の大臣に責し、本を正し源を清らかならしめ、深謀遠慮もて、務めて一法を立つれば必ず舊章に戻らざるを思ひ、一令を行はば必ず永く衆志に孚すを期し、敷衍了事となるを得ず、唯だ^{おもね}阿り取容となるを得ざらしめよ（不解者四）」と求めている。これは逆説的に言えば、当時の朝廷は「天下の人才」を求めず、「民間の疾苦」を知らず、大臣たちは「唯だ阿り取容」する者で溢れていたことになる。

楊廷熙の見るところでは、このような中では人事の不公正が行われることは必然であった。楊廷熙は、功績をあげようと罪を犯そうと、捐納によって賞罰に不公正が生じていることを指摘する³³⁾。まさに「廷臣の薦舉せるは、半ば皆罪を獲たるの人員なり（不解者四）」であり、その結果として「披堅執銳なる者、半ば目して夤縁と爲り、循行數墨なる者、厚く其の爵賞を膺く、將に何を以てか戎行に勵みて士氣を伸ばさん（不解者九）」と不満を吐露している。読書を語るも上辺の理解にとどまりながら、浅薄な知識をふりかざし、巧言と追従により恩賞を得た者への批判とみられ、先の「唯だ阿り取容」にも通じるものといえよう。

33) 捐納とは金銭を納めることによって任官、昇進等の資格を得ることを指す。捐納、特に楊廷熙が上奏において述べた「捐免」「捐復」については、『清國行政法（第6巻）』220～227頁、232～234頁、伍躍『中国の捐納制度と社会』京都大学学術出版会、2011年、368～369頁を参照。

更に、こうした不正は大臣のみに該当するものではなかった。先述の朝廷に対する要求の中では、続けて「條例の無益なるは之を除き、胥吏の法の弄ぶを免き、黜陟の無實なるは之を駁し、督撫の權を専らにするを免き、天に應ずるに實を以てし文を以てせず、事を敬して信にして欺く所無し（不解者四）」となるように求めている³⁴⁾。

ここで除去の対象とされていることからわかるように、大臣と並ぶ不正なものとして指摘されたのは、「胥吏の法を弄ぶ」ことであった³⁵⁾。こうした胥吏について、楊廷熙は「嘗て見たるに久しく奏調を経るの保舉の人員、部曹・胥吏竟に諭旨を不問に置き、輒ち敢へて駁斥す。外臣の奏參を経る者、此れ律例の煩苛なりて、曹司胥吏の中より舞弊するを得る（不解者四）」と述べる。これは、各部で部曹（司官）や胥吏といった中下級層が、上に取り次ぐべき外部からの官僚の推挙や弾劾を遮断しているとのことである³⁶⁾。結果として、推挙や弾劾が実際とはかけ離れたものとなる³⁷⁾。

続けて、このように朝廷内で助長された不公正が齎した、いわばしわ寄せとして「…資格は限りありて自効に難く、賢才所以に消阻すること多し、官祿薄くして以て養廉する無く、士夫所以に職業に荒す（不解者四）」との表現がなされている。先述の「不解者九」で述べられた官僚の窮乏に通じるものといえる。不公正が横行する一方で、「士」が不遇に置かれて

34) 「敬事而信」の出典は『論語』學而第一。訓読や解釈等については金谷治訳注『論語』岩波書店、1999年、34～35頁を参照。

35) 胥吏については宮崎市定「清代の胥吏と幕友－特に雍正朝を中心として」『宮崎市定全集14』岩波書店、1991年（初出は『東洋史研究』16巻4号、1958年）を参照。胥吏とは中央、地方の官庁にあって、官と民の間にあって法に通じ、行政の実務を担った者である。宮崎、前掲論文では胥吏を「一口で言えば官庁における事務請負人とも称すべき者」とする。その起源は人民の労役奉仕にあるため無給であった。そのため胥吏は人民から手数料を徴収していた。これらの点や、前掲注6において述べたように胥吏は雑途と見做されていたことから、科举官僚からは蔑視の対象となっていた。

36) 各官庁は、長官に相当する堂官（尚書2名、侍郎4名）、司官（郎中・員外郎・主事の三段階で、郎中は局長クラス）、書記にあたる筆帖式、末端機構の胥吏から成っていた（坂野、前掲書、25～26頁）。

37) この点については、楊廷熙自身が保举出身であったことを踏まえると、自身の境遇を反映させたものとも考えられる。

いる状況を楊廷熙は糾弾したのであった。

また、総理衙門の「專擅挾持（不解者十）」を指摘し、更に上奏の末尾では同文館と同名の宋代の同文館獄を挙げて「宋史を考するに蔡京等の權に當たるに、忠良を殘害し、正士を排斥し、己に異なる者有らば、即ちに同文館獄に下す」と述べている³⁸⁾。ここからは豊富な人材の意向をくみ取ることなく、総理衙門の意見のみに固執する朝廷への批判が見られる。

こういった楊廷熙の上奏に対し、朝廷はただちに上諭を発した³⁹⁾。朝廷は「嗷嗷たる數千言、甚だしく荒謬に屬す。茲に該知州陳する所の十條に據るに、陳言を摭拾し、自炫を希圖するに過ぎず…楊廷熙同文館の設に因って、並べて各部院大臣を詆及す。試思するに楊廷熙知州の微員なるを以て、在京の王大臣を痛詆するは、是れ何の居心なるや」としたうえで、翰林院出身の大官である曾國藩や李鴻章が対外交渉を担っている現実に触れるなど、「微員」楊廷熙の上奏を批判した。そして、倭仁に対してその指駭を疑い、改めて批判を行いながら、楊廷熙自身に対しては「楊廷熙に至りては草莽の無知なれば、此の求言の際に當たりて、朝廷寛大なれば、姑く深責せず」と、その上奏を却下したのであった。

おわりに

本稿では同文館論争における反対意見として、張盛藻、倭仁、楊廷熙の上奏について若干の検討を行った。そこに共通するものは、技術への蔑視、西洋人やキリスト教への敵愾心である。そして、それらは「士」の尊嚴と「庶」への差別、また、アヘン戦争以来の敗北に根差したものであった。

「士」の尊嚴がいかに反対派にとって重要であったかについては、当時朝廷内にあった翁同龢が、この論争を「朝堂水火のごとく、専ら口舌を以て相争ふ、細きに非ざるが故なり」と述べていることから窺い知ること

38) 前掲注29。

39) 『穆宗實錄』卷204、30～31頁 同治6年5月辛巳条。この上諭において、朝廷は張盛藻や倭仁に対しても「其見識拘迂」と改めて批判している。

ができる⁴⁰⁾。反対派にとって、まさに問題は天文算数学館の附設にとどまるものではなかったのである。だが、本稿でも述べたように、これら反対派の議論は当時の清朝内外の情勢に沿ったものではなかった。故に、より現実的な対応を迫られる朝廷、総理衙門は断固としてこれを斥けた。

これらの点に鑑みれば、同文館論争は伝統と近代の対立、保守派（反対派）の抵抗と見ることは妥当である。しかし、反対を表明した者たちの視点が全て同じであったわけではない。特に楊廷熙は上記の内容以外にも、人材登用について多くを訴えた。やがて、その人材登用に関する訴えは現状への疑問、批判へと展開されていく。そして、批判の矛先は天文算学館の設置を建議した総理衙門のみではなく、中央官庁に相当する六部やそこで働く胥吏、朝廷内の大臣へと向けられていった。

このように、楊廷熙の上奏が張盛藻と倭仁とは異なった部分を持つに至った背景として、「はじめに」で述べたような三者の身分上の相違がある。張盛藻は掌山東道監察御史、倭仁は大学士といった朝廷内の官僚であった。一方、楊廷熙は遇缺即選直隸州知州という待機人員に過ぎなかった。この身分上の差異、特に待機人員という不満が楊廷熙の上奏に反映されていると考えられる。官僚としての自身の地位の向上、政治参加への要求が背景にあるとみることもできよう。当時は太平天国の乱という未曾有の反乱の直後であり、その鎮圧の軍費を得るために捐納が盛んに行われて待機人員の増加、「就職難」が進んだ⁴¹⁾。そのために楊廷熙が以上のような不満や要求を抱いたとしても不思議ではない。

だが、これを「微員」の不満、不平とのみ捉えるべきではない。

その意義について考える手掛かりとなるのが、後に駐英公使となる郭嵩燾の記述である。郭嵩燾は楊廷熙の上奏を読み、その日記（同治6年8月22日）に「其の言尚直なりて、然して恰も一として竅語に中たる無し。中外競ひて其の文を傳誦せるは、乃ち宋より以後、議論繁多なるは、徒らに

40) 翁萬戈編 翁以鈞校訂『翁同龢日記 第2巻』中西書局、2012年、557頁、同治6年3月20日条。

41) 夫馬進「中国近世の官職授与制」吉田光男編著『東アジア近世近代史研究』一般財団法人 放送大学教育振興会、2017年、50頁。

流俗の稱譽を博すを以てせばなるを知るのみ。事理に按切せば、則ち之を失すること遠し。…楊の同文疏内、四条は胥吏の舞弊を論じ、五条は六部堂官の其の職を失ふを論ず、亦た稍や近日の情弊に中たるも、言の浮泛なるあり、事理にも亦た時に出入有り、終に亦た捕風捉影の談あるのみ。…大抵皆總理衙門原奏の一二語を引きて之に駁正を加へ、其の終に正途學習の成命を收回するを請ふ、摺尾に蔡京の同文館獄を起こすを引き、謂へらく同文館は宋時の獄名に係ると、考據亦た殊に疏舛なり」と記している⁴²⁾。

この郭嵩燾の記述からは、当時、楊廷熙の上奏を「中外競ひて其の文を傳誦」したことがわかる。また、郭嵩燾自身もその内容を批判しながらも、「稍や近日の情弊に中た」っているなどと評している。これは、楊廷熙による現状への批判が、多数の朝廷内外の官僚に共有されていたことを示している。

やがて、楊廷熙の上奏からおよそ30年後には日清戦争の敗北という危機を受け、戊戌の変法が行われた。この変法は康有為の代奏を発端とするものであった。一見すると、その骨子は西洋の制度等の抜本的な導入であったが、同時に人材登用も提案され、胥吏への対策や下級官僚の政治への参加が示されている⁴³⁾。

このように見れば、楊廷熙の上奏は後の変法派にも通じるものがあり、

42) 郭嵩燾 梁小進主編『郭嵩燾全集(9)』岳麓書院、2012年、293～294頁、同治6年8月22日条。郭嵩燾は中国史上初の常駐外交使臣として著名だが、非常に開明的な思想を持ち西洋への理解を示した。また進士の資格を有した科举官僚であり古典研究も行った。郭嵩燾の思想や動向については佐々木、前掲書、第2章のほか、小野泰教『清末中国の士大夫像の形成 郭嵩燾の模索と実践』東京大学出版会、2018年、苗婧「郭嵩燾の西洋認識—「附会」論と文明観を手掛かりに—」『洛北史学』第22号、2020年を参照。同文館論争に際し、總理衙門に対する郭嵩燾の考えについては、小野、前掲書、70～72頁を参照。

43) 戊戌の変法については坂野、前掲書、430～451頁を参照。また、変法の原動力ともいべきものが康有為の政治権力の要求であったことについては、宮古文尋『清末政治史の再構成—日清戦争から戊戌政変まで—』汲古書院、2017年に詳しい。尚、同書については拙書評を併せ参照されたい（根無新太郎「宮古文尋著『清末政治史の再構成—日清戦争から戊戌政変まで—』」（汲古叢書144、汲古書院、2017年）」『東アジア近代史』第23号、2019年）。

その祖型と見做すこともできよう。楊廷熙においても伝統的価値観に固執していたわけではなかった。その強い現状批判は危機感と表裏をなすもので、それが機器に代表される洋務ではなく、自身の境遇も踏まえた人材の登用という問題において発露されたものといえるのではないだろうか⁴⁴⁾。

一概に保守派というものの、その背景や立場は多様かつ複雑である。しかし、近代化を自明の理とするような従来の研究においては、伝統との対立を重視するあまり、天文算学館への反対意見を伝統的な価値観に固執した保守派などと一括りにすることが多かった。本稿で主に述べた楊廷熙について見れば、そのような単純な図式が当てはまらないことがわかる。このような多様な存在を前提にしたうえで清末の近代化、洋務運動は論じられるべきであろう⁴⁵⁾。以後の清末中国において保守派とされる人物に対しての個別的な検討及びその積み重ねについては別稿に期すこととしたい。

44) 人材の重要性、登用については楊廷熙に限ったものではなく、清末に多く論じられたものであった。早くは魏源が論じており（小野川秀美『清末政治思想研究』みすず書房、1969年、9～10頁）、また、例えば日清戦争直後にも論じられている（戚其章主編『中国近代史資料叢刊統編 中日戦争（第3冊）』中華書局、1991年、439～441頁「(2435) 南書房翰林張百熙奏爲和議雖成應急圖自強並陳管見摺」光緒21年閏5月初7日。尚、本史料については歴史学研究会編『世界史史料9 帝国主義と各地の抵抗Ⅱ』岩波書店、2008年、130～131頁に並木頼寿氏による和訳がある）。

45) 例えば、保守派とされた人々を見てもその背景は一樣ではなかったように、清末中国の政治や社会構造は極めて複雑、多様であったといえる。そうした、いわば「中国の論理」を把握したうえで中国の近代化を論じることの必要性を説き、同時期の日本との比較について、制度の受容や技術の巧拙などといった表層部のみに目を向けて優劣、評価を論じるような短絡的な議論を「結果論であって、いわれのない偏見」とする警鐘については岡本隆司『中国の論理 歴史から解き明かす』中央公論新社、2016年、130～146頁を参照。

Technological Bleed-through: The Transformative Effects of Technology on Text

CHRISTOPHER MUELLER

ABSTRACT

As technology progresses, communication has become an increasingly online affair, and language is adjusting itself to match. Social and workplace interactions are often constructed, written, and shared via technological means, be it keyboard, website, keypad, or text chat. This paper presents research from a variety of languages, contexts, and writing systems to show that this technological progress has altered not only the more obvious linguistic spheres, such as vocabulary and morphology, but also infiltrated the actual text itself. The technology we use to communicate online is blending and merging with the writing systems which use it, forming creative new ways of writing. Examples are drawn from research in English, Arabic, Japanese, and Taiwanese in an effort to represent the universality of this phenomenon, as well as bring attention to scripts which are less represented in CMC literature.

Introduction

If culture can be defined, as Goodenough (1957) and Wardaugh (2010) suggest, as “whatever a person must know to function within a particular society” (p. 229), then technology has certainly established itself as an integral aspect of modern culture. Social media, computers, and smartphones are becoming increasingly widespread,¹⁾ and as a result, vocabulary and expressions with roots in these technologies, (e.g., *selfie*, *hashtag*, *download*, etc.) have rapidly filtered into our daily lexicons. Technology-infused language has begun to color much of our communication, be it through metaphor (e.g., *computer virus*), instances of so-called netspeak or chatspeak (e.g., *u2*, *LOL*, *tysm*), or even the sudden proliferation of the *e-* prefix (e.g., *e-mail*, *e-Arabic*) (Crystal, 2001; Dauodi, 2011). Such linguistic phenomena have not gone unrecognized, historically. Sapir (1929) and Worf’s (Carroll, 1956) seminal theory of linguistic relativity, for example, posits that there is some link between languages, their content and structures, and how speakers of these languages process and understand the world around them. Using this theory as a locus of analysis, and considering the apparent interrelations between technology and culture, intriguing questions begin to develop. Specifically, if language can serve as a reflection of culture, then to what degree is language itself directly affected by technology?

A growing number of authors have made efforts to tackle these and similar questions, much of the research coalescing under the broader umbrella of computer-mediated communication (CMC). Until more recently, however, the bulk of CMC literature was “focused almost exclusively on emergent practices in English” (Danet & Herring, 2003, para. 1), neglecting instances of online communication in other languages. While there has been some intriguing research done on differing scripts (Daoudi, 2011; De Oliveira, 2003; Hård af Segerstad, 2002), there remains a noticeable lack of attention placed on languages which do not make use of the Roman alphabet (e.g., Chinese, Thai, Arabic, etc.). These languages have quite literally billions of users in combination, so how is it they have avoided a wider representation in the literature?

1) It is now estimated that around 60% of the world’s population are regular internet users, for example (Internet World Stats, n.d.-b).

The reasons for this are likely twofold. Firstly, the text-transmission protocol used on the internet is based on the ASCII character set. ASCII is an acronym for American Standard Code for Information Interchange and was established in the 1960s in the United States (Danet & Herring, 2007). As the name suggests, the character set is based on the Roman alphabet and the phonemic inventory of the English language. The most portable and basic textual input of email and chat, called “plain text”, contains only unformatted ASCII characters. Though this is slowly changing, and non-standard forms of computer input are becoming more available, the language of online communication (and computation in general) remains, on the whole, an English one. Secondly, most CMC takes place online, and until recently, the vast majority of internet-connected users were from the United States. In 2003, for example, the United States made up 36.5% of internet users worldwide, compared to the second-ranked China (10.9%) and third-ranked Japan (9.7%) (Nishimura, 2003). Though this has changed in more recent years (China and India have since overtaken the US), for the majority internet’s nascence, its users were primarily English speakers (Internet World Stats, n.d.-a)²⁾.

At this point, it may also be useful to further define “online communication”. “Online” is perhaps something of a misnomer, as this form of communication need not be purely internet-based (Danet & Herring, 2003). Short Message Service (SMS) (i.e., text messaging), mobile chat applications (e.g., Whastapp, Skype), and the like all fall within this category. Much of it does include different varieties of communication on the internet, however, including bulletin board systems (BBS), social media sites such as Reddit or Facebook, or text chat applications such as Instant Messenger or Internet Relay Chat (IRC).

While there have been many important articles and studies within CMC regarding the intersection of technology and language, much of this research has focused on documenting and categorizing the emergent jargon (Crystal, 2001; Squires, 2010) or the unique hybridization (or ‘in-between-ness’) of the spoken and written word in online communication (Ferrara, Brunner, &

2) Additionally, while the number of internet users in non-English speaking countries has risen significantly, as of October 2022, 60.9% of the top 10 million websites on the world wide web are in English (W3Techs, n.d.).

Whitmore, 1991; Herring, 1996, Section 1). There has been far less attention paid, however, to scripts themselves (the alphabets, syllabaries, and logograms), the devices used to input these scripts (keyboard, keypad), and how they interact. This article, then, will attempt to collect and synthesize some of the currently available research available in this area, drawing attention to the various research gaps present concerning the transformative effect of technology on the constructed elements of language itself, with a secondary focus on writing systems which do not use the Roman alphabet (i.e., the alphabet of ASCII). Of specific interest are instances of technological 'bleed-through', where word-on-page (or more aptly 'word-on-screen') text is directly influenced or altered by the underlying technology. This should also serve as visible, concrete evidence for a Whorfian view of language, quite literally shaped by its cultural (and by extension, technological) context.

LEET Speak

One particularly cogent area of exploration is that of computer gaming, specifically massively multiplayer online role-playing games (MMORPGs). MMORPGs require an online connection and maintain a persistent online world meant to be explored with other players. A popular example is World of Warcraft, which at its height boasted 12 million subscribers (Blizzard Entertainment Inc., 2010). Interaction between players is encouraged (and often required) to successfully complete in-game tasks, and many tools for socialization, such community hubs and user-organized guilds, are present within the game. Communication is accomplished primarily through keyboard-based text chat, and as such, online gaming culture is filled with examples of this splicing of technology and language. In a 2005 article, for example, Blashki and Nichol investigated "LEET speak" or "1337 5p34k", a form of language "specifically developed for, and by, a community of young people who play computer games" (p. 77). Again, since communication in the game is usually entered via keyboard and computation has a numerical aspect (hexadecimal/binary/etc.), numbers are often used as visual analogs for letters. The number "1337", then, would correspond to "LEET", a truncation of "elite".

Following the research of Beavis (2005) and Gee (2003), the authors set out to discover how language served to define a specific cultural group, i.e.,

“gamer geeks”, and vice versa. The project focused on a group of forty first-year students in a tertiary education program. Participants self-selected from a large course on gaming fundamentals, and data were collected from an online discussion board prepared for the course. Both the researchers and participants contributed to the online forum discussions, which were centered around leet speak. Many examples of different features and intricacies within leet speak were collected, including, as in the following sentence, a lack of standard spelling or grammar rules:

“1|=\\ 0u |{4N r34|) t|~15t|~3N\\ 0u i5 t3|~|_337”

(Translation: ‘If you can read this then you is teh leet’) (Blashki & Nichol, 2005, p. 83)

Also of note, the word “teh” here is not a true misspelling. In multiplayer gaming, communication between individuals often takes place during competitive and high-action gameplay. As such, typographical errors are not uncommon. In many cases, however, these ‘typos’ have entered the lexicon and become the default. The article “the” is one example of this, often intentionally written as “teh” (Tavosanis, 2007). Another common case would be the word “pwned”, which can represent the word “owned”. The ‘P’ and ‘O’ keys are located side-by side on most English-language (QWERTY) keyboards, allowing for such an error. In these instances, the method of input (i.e., keyboard) in concert with the technological medium (i.e., computer gaming) has altered certain spelling conventions. The devices used to compose the text, the placement of the keys and the position of the fingers, have created a technology-specific spelling for this community of users; it would not exist were it not for the specific technologies used.

Blashki and Nichol (2005) were also interested in how leet speak had come to be, and how its users perceived the language. While interpretations varied, one prevailing theory was that leet speak originated in an attempt, as one of the participants stated, “to stay under the radar when it came to pirating” (p. 81), as search engines were unable to process text written in such a manner. In this way, the edited and purposely malformed text, combining numbers, letters, and punctuation, came to be as a response to (and circumvention of) the technological medium in which it was used. It also ‘looks’ geeky, visually incorporating numbers and symbols like those used in programming languages and text chat. Indeed, there was a general consensus among both participants and researchers that leet speak also performed an

affiliative function, reinforcing social bonds within a specific outsider group (i.e., “geeks”). Leet speak, then, “evolved from the game geek’s need to express and communicate within a supportive community of like-minded participants” (p. 85). The technological foundations of both the computer game genre and piracy/hacking communities amalgamated to produce a form of English which could address both the technical and social concerns within geek/gamer culture.

Digital Sarcasm

Another interesting example of such an amalgamation involves the production and perception of sarcasm in online environments (Greenwood & Maynard, 2014). Two researchers from the United Kingdom attempted to create a software program which could accurately detect sarcasm on the social media service Twitter. While sarcasm in speech is detectable by changes in prosody, timing, posture, or facial expression (Attardo, Eisterhold, Hay, & Poggit, 2003), when sarcastic utterances are processed digitally they become much more difficult to distinguish (Kunneman, Liebrecht, & van den Bosch, 2013). As one way of compensating for this, the hashtag symbol (or ‘#’) developed as an indicator of sarcastic tone.

The hashtag symbol’s current role in online communication is rooted in an earlier technology. While it was originally used as a symbol to designate a number (e.g., #1), with the advent of online chatrooms, specifically IRC, the hashtag became a method of indicating interest groups and topics (e.g., #comicbooks) (Channel Scope, n.d.). Its usage has since extended beyond online chatrooms to platforms such as Instagram and Twitter. It now functions as a metadata tag, transforming a word or phrase into a clickable link which then leads to additional groups of posts including the same hashtagged word(s) (Twitter Inc., n.d.). In their study, Greenwood and Maynard (2014) collected a corpus of 134 Twitter posts (or ‘tweets’) containing the phrase “#sarcasm”. They discovered that this expression was frequently used to reverse the polarity of the preceding phrase. In other words, the hashtag served to ‘tag’ an utterance as sarcastic in tone. One sample from their data is the following sentence:

“You are really mature. #lying #sarcasm” (p. 4239)

Without the added tag(s), the intended meaning is lost. Thus,

hashtagged expressions function as a replacement for the ancillary or paralinguistic elements which would be present in 'offline' speech. The research suggests that the hashtag has become an integral part of the utterance, as it cannot be correctly parsed without it. In this way, technological features have become somehow fused with the semantics of the language, while simultaneously incorporating technological elements (i.e., the metadata tags) into the text itself. The technology is thus directly reflected in the text, and it remains usable (clickable) as a technology. In other words, the utterance is itself a form of technology.

Additionally, tagged expressions are not limited to the word "sarcasm" or even any single word, as hundreds of instances of "#notreally" or "#irony" were also discovered (2014). Neither is this a purely English phenomenon; Dutch researchers (Kunnean et al., 2013) performed a similar study and came to similar conclusions regarding the role of hashtags. It is also interesting to note that unlike in the previous studies, this specific linguistic feature was not borne out of technology's facilitation (i.e., the advent of computer gaming), but rather from its failure (i.e., the insufficiency of computer interaction). In short, written expressions are filling semantic gaps with what was originally a feature of online chatrooms.

In my own research (Mueller, 2016), I have encountered a similar phenomenon. On Reddit, a social media and content-aggregating website, users can leave comments on posted submissions in BBS-style 'threads'. In many of these comment threads, users would end their sentences with "/s" to indicate a sarcastic or ironic tone³. Over 50 examples of /s-tagged comments were collected over a period of several months. A representative sentence from the data set can be seen here:

"That's a really valid point you made there! What a great comment! /s"
(p. 89)

As in Greenwood and Maynard's (2014) findings, a 'tag' has been placed on the sentence to indicate the speaker's sarcastic intent. Instead of the '#' symbol, however, we have a different token: a scrap of pseudo-HTML code. The "/s" in this instance serves as an abbreviated version of "</s>" which is

3) These s/-tagged posts were not limited to Reddit, however, and can be readily seen in a variety of other online spaces such as discussion forums, blogging websites (e.g., Tumblr), and Youtube comment sections (Mueller, 2016).

itself a truncation of the HTML code “<s>TEXT</s>” (Mueller, 2016). In the HTML coding language, “to initiate a certain function, such as italicizing text, a tag such as <i> is used. In turn, to end this tag, a corresponding </i> tag is used. In that sense <i> equates to ‘begin italics’ and </i> equates to ‘end italics’, with the text to be italicized nested in-between. In this manner, the </s> tag is functionally stating ‘end sarcasm’ or ‘the sarcasm ends here’” (p. 96). The two languages, one for communication (English), and one for coding (HTML), have joined here to perform a specific semantic function. The HTML code, the very technology used to construct the website, is “seeping out” into the text itself, becoming a part of the utterance.

Syllabaries and Logograms

Though far less research exists on languages which do not make use of the Roman alphabet, some interesting studies have still surfaced. One such study (Nishimura, 2003) focuses on the innovative use by Japanese speakers of *kanji* and other scripts on internet BBS-style message boards. Nishimura grounds her study in previous research on online communication in Japan (e.g., Katsuno & Yano, 2002), but is unique in her focus on how the online medium has changed not only the message, but the actual script itself. Her data were collected from comments on Japanese fan-websites featuring popular actors, films, and music. Nishimura noticed that writing styles on such websites were markedly different from Japanese as it was traditionally written. One such feature was the interspersion of English letters (known as *romanji* script) and words with traditional Japanese *kanji*, *hiragana*, and/or *katakana* script. One possible reason for this is that Japanese keyboards did not function in a similar way to English keyboards. To write in Japanese on certain computers, “users must use so-called *romaji-kana-kanji* conversion software like Microsoft IME or Justsystem’s ATOK” (para. 25). In these cases, text must first be entered in *romanji*, the Roman alphabet, based on their Japanese pronunciation. The software then searches for a corresponding word in *hiragana* and converts the *romanji* into the *hiragana* syllabary. If the desired word is in *katakana*, a “*katakana* key” is pressed; however, if the desired word is in *kanji*, then a “conversion key” must be pressed, and a menu of recently used *kanji* symbols which correspond with the *hiragana* word are displayed. The user may then select the desired symbol. The system is

complex, and potentially time consuming; it is often simpler to default to the English character, as it is the first point of input. Moreover, in cases where a *katakana* word would be preferred or more correct, *hiragana* may be retained “for the purpose of speeding up typing” (para. 82). The keyboard input, in combination with the available software, has thus had a profound effect on the choice of script used.

Nishimura (2003) also found that in online communication, kanji verb stems would often appear isolated between parentheses. When used as verbs, *kanji* “are not normally used in isolation; they are used with *hiragana* for inflectional endings, tense, and so on” (para. 73). In these cases, *kanji* were being used between parentheses to indicate an action, for example (涙), *namida*, or “tears”, would be used to indicate that the speaker was sad or crying (para. 74). This usage was specific to online communication. Users were detaching kanji from their traditional grammatical structures (while adding symbols available on their keyboards) for quickness and ease of use.

In addition to this, Japanese speakers communicating online were making use of a system of letters-for-numbers reminiscent of the previously discussed “leet speak”. The sequence of numbers “4649” in the Japanese, for example, can represent the word “*yoroshiku*”. In Japanese, the number 4 is pronounced *yon* or *shi*, 6, *roku*, and 9, *ku*. The four sounds combine to produce *yoroshiku* (para. 78). As in leet speak, numbers here are serving as replacements for letters (or more precisely, syllables). Unlike leet speak, however, this system is based on pronunciation of the numbers rather than their visual characteristics. Here, once again, there is evidence of serious linguistic changes which are endemic to the electronic medium in which they are consumed and produced; the language has been altered to facilitate the technology used (keyboard/computer) and the technological context (online message boards).

A second study of a non-Roman writing system involves the concept of “playfulness” online in speakers of Taiwanese (Su, 2009). The author focuses on two specific languages utilized in Taiwanese online communication, namely Stylized Taiwanese (ST) and Stylized Taiwanese-accented Mandarin (STM). Her study examines the creative use of these stylized forms on three recreational BBSs and a Web-based BBS belonging to two Taiwanese universities. Both languages are used in similar ways in online communication. Taiwanese does not have a standardized writing

誰人甲我比 [ʃei zən tɕia wo pi] who, person, to-better, I/me,
compete

瞎郎尅挖畢 [cia lan̩ ka wa pi] blind, man, to-embarrass,
to-dig, to complete (p. 325)

Arabizi

Another example of text-on-page transforming to suit technological advancement has recently appeared in written Arabic. Many younger speakers of Arabic have foregone traditional Arabic script completely where technology is concerned (al Khalil & Palfreyman, 2010; Yaghan, 2008). In media such as texting and instant messaging, the Arabic alphabet is often unavailable (or is available but unwieldy) as until more recently, “the Arabic language was not supported by the widespread technology” (2008, p. 44). Similar to the situation in Japan, the Roman alphabet is much more readily found on keyboards and keypads. As such, a novel form of written Arabic has developed to compensate, using a combination of Roman (ASCII) characters and (Arabic) numerals. If a specific Arabic phoneme has an equivalent in the Roman alphabet, the equivalent is used (e.g., *b* for ب). If

no equivalent is available, a specific number is used (e.g., 7 for ح). For example, حُمْص becomes 7ommos, or خالد becomes 5aled.

In a 2008 study, Yaghan performed extensive group interviews with university students in Jordan in an effort to document this form of Arabic and describe its rules and features. The slang term for the writing style is *Arabizi*, a portmanteau combining the words *arabi* (Arabic) and *engliszi* (English). Yaghan discovered that the use of *Arabizi* was widespread among young people throughout Arabic speaking countries, and that each country had their own specific form (or forms) depending on the local dialect. Some regularities, however, did surface from within the data. Vowels, for example, are optional in *Arabizi*, and can be removed at the user's discretion. This was a direct result of its origin within text messaging; parsimony was needed to allow for a maximum number of characters. True to its name, *Arabizi* also makes use of both English and Arabic, though the English is limited to "common World Wide Web and cellular phone messages ("plz" for "please," "thnx" for "thanks," etc.)" (p. 42). Stressed consonants are written twice to indicate their emphasized status (e.g., *ennik*), and certain symbols are used as affixes to indicate plurality (@) or the past tense (8).

Yaghan was also interested in why young Arabic speakers were gravitating so strongly towards *Arabizi*. Technological factors remained valid, as some cellular phones did not have Arabic script capability, and many that did allowed fewer characters. However, it was also expressed by the students that "using one set of 'English' keys that can be applied to the two languages is more convenient, and less confusing" (p. 45). *Arabizi* was also viewed as a more open, "freer" writing system than formal, standardized Arabic (النصحى or *fussha*). Because it was not taught at any official level, and is acquired solely through practice, *Arabizi* has more fluidity in its rules, especially when compared to the rigidity of *fussha*. There is, for example, nothing akin to 'typos', as words can be spelled in a variety of different ways depending on the user's country, region, or individual preferences. The author also observed that *Arabizi* was becoming increasingly common, and had begun to appear outside of its original online context in the form of handwritten notes, CD covers, movie posters, and even music videos (e.g., Nancy Ajram, 2013).

Yaghan also notes that in the last two centuries, multiple explicit attempts have been made to standardize Arabic using the Roman alphabet, the earliest

recorded example having occurred in 1880, and the most recent in 1943. All such attempts have failed. It is interesting that a standardized writing system seems to be in the process of generating organically. The technological advances which served as the impetus for *Arabizi*'s development may have helped to create a fresh stage in the standardization of modern Arabic.

In addition to Yaghan's study, more and more articles on *Arabizi* have begun to appear. Al Khalil & Palfreyman (2010) investigated patterns of use in young female students in the United Arab Emirates. The authors were interested in how consistent the ASCII representations were, what influences shaped spelling choice, and what purposes *Arabizi* served for its users. Using a combination of corpus data, surveys, and informal interviews, they arrived at similar conclusions to Yaghan (2008), namely that the use of *Arabizi* was extremely flexible, informal, and "easier to type" (Al Khalil & Palfreyman, 2010, p. 17). As in Nishimura's (2003) study, a technology's ease of use was the impetus for a change in the writing used.

Conclusion

The studies in this paper represent research on a variety of writing systems, language backgrounds, and technological contexts. They are common, however, in their representations of written language as subject to (and often inspired by) the flow of technological advancement. In each of the languages discussed, written text has been affected visually, structurally, or even semantically by means of technological input (e.g., keyboards, cellphones) and/or technological environment (e.g., bulletin boards, social media). As technology has become ever more a part of the global day-to-day, some change to language is, of course, expected; new words become necessary and old words become obsolete. I hope I have shown here, however, that the effects technology has on language run much deeper, and in many of these cases, even manage to infiltrate the appearance of the language itself. Changes to sentence structure and grammar (e.g., Nishimura, 2003), spelling (e.g., Yaghan, 2008), word choice (e.g., Su, 2009), and the incorporation of technological symbols into our writings (e.g., Greenwood & Maynard, 2014; Mueller, 2016) all stand as examples of how technology has managed to permeate the very text it is used to construct, to 'bleed through' into the written word.

Though continued research is undoubtedly needed, especially with regards to smaller languages and languages not compatible with the ASCII format, I believe that the (albeit limited) examples discussed above have served to show that language is indeed profoundly affected by the culture (and by extent, technology) in which it is suspended. But culture, language, and, perhaps most of all, technology are highly dynamic creatures, and research in these areas must be constantly refreshed lest it risk stagnation. To this end, studies in CMC, such as those included here, remain an important addition to language literature at large. In an increasingly 'online' world, these studies, and others like them, reveal that the technology we use to communicate is changing not only what we write, but how we write it.

References

- Al Khalil, M., & Palfreyman, D. (2003). 'A funky language for teenz to use': Representing Gulf Arabic in instant messaging. *Journal of Computer Mediated Communication*, 9, 1.
- Attardo, S., Eisterhold, J., Hay, J., & Poggi, I. (2003). Multimodal markers of irony and sarcasm. *HUMOR: International Journal of Humor Research*, 16 (2), 243-260.
- Beavis, C. (2005). Pretty good for a girl: Gender, identity and computer games. In S. de Castell & J. Jenson (Eds.), *Changing views: World in play*. Vancouver, British Columbia, Canada: University of Vancouver.
- Blashki, K., & Nichol, S. (2005). Game geek's goss: Linguistic creativity in young males within an online university forum (94/\^3 933k^5 9055oneone). *Australian Journal of Emerging Technologies and Society*, 3, 77-86.
- Blizzard Entertainment Inc. (2010, October 7). *World of Warcraft® subscriber base reaches 12 million worldwide* [Press release]. <https://investor.activision.com/news-releases/news-release-details/world-warcraft-r-subscriber-base-reaches-12-million-worldwide>
- Carroll, J. B. (ed.) (1956). *Language, thought, and reality: Selected writings of Benjamin Lee Whorf*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Channel Scope. (n.d.). *Internet relay chat: Channel management*. Retrieved October 8, 2022, from <http://tools.ietf.org/html/rfc2811>
- Crystal, D. (2001). *Language and the internet*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Danet, B., & Herring, S. (2003). Introduction: The multilingual internet. *Journal of Computer Mediated Communication*, 9, 1.
- Danet, B., & Herring, S. (2007). Multilingualism on the Internet. In M. Hellinger & A. Pauwels (Eds.), *Handbook of language and communication: Diversity and change* (pp. 554-585). New York: Mouton de Gruyter.
- Daoudi, A. (2011). Globalization, computer-mediated communications and the rise of e-Arabic. *Middle East Journal of Culture and Communication*, 4 (2), 146-163.
- De Oliveira, S. (2003). Breaking conversational norms on a Portuguese users network: Men as adjudicators of politeness? *Journal of Computer Mediated Communication*, 9, 1.
- Ferrara, K., Brunner, H., & Whittemore, G. (1991). Interactive written discourse as an emergent register. *Written Communication*, 8, 8-34.
- Gee, J. (2003). *What video games have to teach us about learning and literacy*. New York: Palgrave Macmillan.
- Goodenough, W. H. (1957). Cultural anthropology and linguistics. In P. L. Garvin (Ed.), *Report of the seventh round table meeting on linguistics and language study*. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Greenwood, M., Maynard, D. (2014). Who cares about sarcastic tweets? Investigating the impact of sarcasm on sentiment analysis. *LREC 2014*, 4238-4243.
- Hård af Segerstad, Y. (2002). Effects of mobile text messaging on the Swedish written language: Human adaptability made visible? In F. Sudweeks & C. Ess (Eds.), *Proceedings of cultural attitudes towards communication and technology* (pp. 355-360). Montréal, Canada: Université de Montréal.
- Herring, S. C. (ed.) (1996). *Computer-mediated communication: Linguistic, social, and cross-cultural perspectives*. Amsterdam: John Benjamins.
- Internet World Stats. (n.d.-a). *Internet 2022 usage in Asia*. Retrieved October 3, 2022, from <https://www.internetworldstats.com/stats3.htm>
- Internet World Stats. (n.d.-b). *World Internet Users and 2022 Population Stats*. Retrieved October 3, 2022, from <https://www.internetworldstats.com/stats.htm>
- Katsuno, H. & Yano, C. (2002). Face to face: On-line subjectivity in contemporary Japan. *Asian Studies Review*, 26, 205-232.
- Kunneman, F., Liebrecht, C., & van den Bosch, A. (2013). The perfect solution for detecting sarcasm in tweets# not. *WASSA 2013*, 29.

- Mueller, C. (2016). Positive feedback loops: Sarcasm and the pseudo-argument in Reddit communities. *Working Papers in TESOL & Applied Linguistics*, 16(2), 84-97.
- Nancy Ajram. (December 6, 2013) *Aamel aekla* (official music video) [Video] Youtube. <https://www.youtube.com/watch?v=6mWD96Rx5Ds>
- Nishimura, Y. (2003). Linguistic innovations and interactional features of casual online communication in Japanese. *Journal of Computer Mediated Communication*, 9, 1.
- Sapir, E. (1929). The Status of Linguistics as a Science. *Language*, 5, 207-214.
- Squires, L. (2010). Enregistering internet language. *Language in Society* 39, 457-492.
- Su, H. (2009). Reconstructing Taiwanese and Taiwan Guoyu on the Taiwan-based internet. *Journal of Asian Pacific Communication* 19(2), 313-335.
- Tavosanis, M. (2007, January 8). A causal classification of orthography errors in web texts. *IJCAI-07 Workshop on Analytics for Noisy Unstructured Text Data (AND-07)*, 102.
- Twitter Inc. (n.d.). *How to use hashtags*. Retrieved October 10, 2022, from <https://help.twitter.com/en/using-twitter/how-to-use-hashtags>
- Wardaugh, R. (2010). *An introduction to sociolinguistics*. Sussex, UK: Wiley-Blackwell.
- W3Techs. (n.d.). *Usage statistics of content languages for websites*. Retrieved October 8, 2022, from https://w3techs.com/technologies/overview/content_language
- Yaghan, M. A. (2008). Arabizi: A contemporary style of Arabic slang. *Design Issues*, vol. 24(2), 39-52.

会員業績

(2022年10月～2023年9月)

小 林 泉

- 著書・共著 『ようこそオセアニア世界へ』、昭和堂 2023年3月、333頁、担当第16章「オセアニアと日本－海でつながる私たち」。
- 研究論文・単著 「太平洋の地域情勢」、海洋政策研究所、『島嶼研究ジャーナル』第12巻2号、6-24頁、2023年3月。
- 論説・単著 「中国を受け入れる島嶼国の心情」、太平洋協会、『パシフィックウェイ』第161号、1-2頁、2023年2月。
- 論説・単著 「文献収集の立役者－近年の書籍・文献事情」、海洋政策研究所、『南洋群島文献目録Ⅱ』、152-159頁。
- 論説・単著 「今と昔、日本の対島嶼国外交」、太平洋協会、『パシフィックウェイ』第162号、1-2頁、2023年8月。
- 研究調査 2023年2月9-12日、奄美大島本島、テーマ：島嶼の経済社会開発。
- 研究調査 2023年3月14-19日、小笠原諸島父島、テーマ：島嶼の経済社会開発。
- 研究調査 2023年9月1-8日、ミクロネシア連邦・ポンペイ州及びチューク州、テーマ：島嶼の経済社会開発。

根無 新太郎

- 公開講座 生涯学習講座「歴史から見た中国と海洋」、大阪学院大学エクステンションセンター、2023年6月17日、大阪学院大学2号館。
- 公開講座 「中国史における「法」とは？」、岸和田ロータリークラブ、泉州を考える会、2023年9月21日、岸和田天神宮。

真 山 全

- 研究論文・単著 「露ウクライナ戦争における原子力発電所攻撃の国際人道法上の評価」、日本赤十字国際人道研究センター、『人道研究ジャーナル』、第12巻、69-94頁、2023年2月。
- 研究論文・単著 「海上保安庁と自衛隊の海上警備行動における連携－国際法的側面」、奥脇直也他編、『海上保安体制の現状と課題－多様化する海上保安任務』、有斐閣、269-284頁、2023年6月。
- 研究論文・単著 「武力紛争法における『核の忘却』の終焉－対ウクライナ核攻撃を武力紛争法からどのように・どこまで非難できるか」、有斐閣Onlineロージャーナル、2023年7月号（YOLJ-L2306008）、全6頁、2023年7月。

- 研究ノート・単著 「露ウクライナ戦争とモントルー条約・海戦法規・海上中立法規」、日本船長協会、『船長』、第140号、25-43頁、2023年3月。
- 研究ノート・単著 「中国による対台湾海上交通妨害の国際法的検討－中国の試みる zonal measure」、日本台湾交流協会、『交流』、第986号（2023年5月号）、7-16頁、2023年5月。
- 学会・討論者 日本防衛学会秋季研究大会・研究報告部会「国際法から分析するロシアのウクライナ侵攻」、2022年11月、防衛大学校。
- 学会・座長 国際法協会（ILA）日本支部研究大会・「国際犯罪への対処」座長、2023年4月、東京大学。
- 学会・座長 国際法学会研究大会・分科会「国際刑事法における『違反』」座長、2023年9月、新潟コンベンションセンター・朱鷺メッセ。
- 講 義 陸上自衛隊小平学校幹部法務運用課程、論題「露ウクライナ戦争と武力紛争法」、2022年10月、陸上自衛隊小平学校。
- 講 義 自衛隊統合幕僚監部統合幕僚学校令和5年度前期3幹部学校合同統合教育（幹部高級課程）、論題「露ウクライナ侵攻関係国際法暫定論点メモ」、2023年4月、統合幕僚学校。
- 講 義 陸上自衛隊小平学校幹部法務運用課程、論題「露ウクライナ戦争と武力紛争法」、2023年9月、陸上自衛隊小平学校。
- 演 習 航空自衛隊幹部学校幹部高級課程（83AWC）、「武力紛争法ゼミ」講師、2023年6月、航空自衛隊幹部学校。
- 講 演 國立政治大學日本研究學位學程講演会、論題「中国による台湾海上封鎖と国際法（中國對台灣進行海上封鎖與國際法）」、2022年11月、オンライン。
- 講 演 陸上自衛隊小平学校小平法務シンポジウム、論題「露ウクライナ戦争と『核』－原子力発電所攻撃と核兵器使用の国際法上の評価」、2023年7月、陸上自衛隊小平学校。
- 講 演 軍事史学会関西支部主催（第125回定例研究会）、論題「露ウクライナ戦争における地上目標破壊の国際法的评价－原子力発電所攻撃」、2023年7月、大阪学院大学。
- 公開講座 笹川平和財団核不拡散・核セキュリティ研究会主催、論題「露ウクライナ戦争と原子力発電所攻撃」、2022年11月、オンライン。
- 公開講座 広島市立大学広島平和研究所主催（「ウクライナへの軍事侵攻と国際社会への影響－安全保障、国際秩序、国内政治・外交の行方」プロジェクト）、論題「露ウクライナ侵攻関係国際法論点メモ－敵対行為の評価及び個人の刑事責任の追及」、2023年2月、オンライン。
- 公開講座 兵庫県生きがい創造協会阪神シニアカレッジ卒業生国際理解ゼミ

主催、論題「露ウクライナ戦争における原子力発電所攻撃の武力紛争法上の評価－日本の原子力発電所の保護のためにはどうしたらよいか」、2023年7月、宝塚市立南口会館。

インタビュー記事 「ダム攻撃は国際法違反なのか」、『朝日新聞デジタル』、2023年6月7日（国際報道部星井麻紀記者による）。

報告書・共著 『通過通航権が適用される日本の海峡の船舶自動識別装置（AIS）データ解析による特定－通過通航が日本の沿岸・港湾管理に与える影響の法的検討』、日本港湾協会令和4年度港湾関係研究奨励助成研究成果報告書、全22頁、2023年6月。

研究成果概要・共著 「通過通航権が適用される日本の海峡の船舶自動識別装置（AIS）データ解析による特定－通過通航が日本の沿岸・港湾管理に与える影響の法的検討」（「令和4年度港湾関係研究奨励助成報告会」報告概要）、日本港湾協会『港湾』、2023年8月号、56頁、2023年8月。

三 井 清 弘

研究論文・単著 「国際連合事務局の人事採用システム－邦人職員増強策の課題－」、日本比較生活文化学会、『比較生活文化研究』、第29号、55頁-64頁、2022年。

研究発表 「国際連合事務局の人事採用システム－邦人職員増強策の課題－」、日本比較生活文化学会第38回研究発表大会、2022年11月20日（オンライン開催）。

大阪学院大学国際学学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学国際学学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、国際学すなわち政治、経済および文化の国際的視野における研究を通じて、日本の進展と世界との交流に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学国際学論集」の発行
 2. 研究会、講演会および討論会の開催
 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で、本会の趣旨に賛同する者
 2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の事業に参加し、本会の機関誌その他の刊行物の配布をうけることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選を妨げない。
1. 会長 1名
 2. 副会長 1名
 3. 庶務委員 2名
 4. 編集委員 2名
- 第8条 会長、副会長ならびに委員は会員の選出とし、総長がこれを委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。
- 第12条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金、その他の収入をもってあてる。
- 第13条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。本連合に関する規程は別に定める。
- 第14条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。
- 第15条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認を得るものとする。

附 則

1. この会則は、平成2年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成5年4月1日に改正し、施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日に改正し、施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日に改正し、施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日に改正し、施行する。
6. この会則は、2021年4月1日に改正し、施行する。

以上

CONSTITUTION OF THE INTERNATIONAL STUDIES ASSOCIATION OF OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

- Article I. The name of this association shall be the International Studies Association of Osaka Gakuin University, hereinafter referred to as ISA.
- Article II. The office of ISA shall be located in the library of Osaka Gakuin University.
- Article III. The purpose of ISA is to contribute to the development of Japan and its relations with the world, through research in international studies, that is, research in politics, economics, and culture from an international perspective, in accordance with the founding principles of this university.
- Article IV. ISA shall conduct the following activities:
1. Publish a journal, *International Studies: the Journal of the International Studies Association of Osaka Gakuin University*.
 2. Hold study meetings, lectures and forums.
 3. Other activities necessary to fulfill the objectives of the organization.
- Article V. Membership in ISA is open to:
1. Full-time faculty members of Osaka Gakuin University and Osaka Gakuin University Junior College who support the objectives of ISA.
 2. Any other person who supports the objectives of ISA and is approved by the Executive Committee.
- Article VI. Members are eligible to participate in ISA activities and receive the journal and other ISA publications.
- Article VII. The officers of ISA shall be a President, a Vice President, two executive secretaries, and two editorial staff. The term of office shall be two years, and reelection to office shall be permitted.
- Article VIII. The officers shall be elected by and from the membership of ISA, and commissioned by the Chancellor of the university.
- Article IX. The President shall represent ISA and supervise its affairs. The Vice President shall assist the President. The officers shall form an Executive Committee to administer the association and plan its activities.
- Article X. The President shall summon and preside over meetings of the Executive Committee.
- Article XI. The general assembly of ISA shall be held once every academic year. The President may also call special meetings when necessary.
- Article XII. The expenses of ISA shall be met by grants from Osaka Gakuin University, donations, and other income.
- Article XIII. Liaison with other academic societies shall be maintained through the *Federation of Academic Societies of Osaka Gakuin University (Osaka Gakuin Daigaku Gakkai Rengō)*.
- Article XIV. The fiscal year shall begin on April 1 of each year, and end on March 31 of the following year.
- Article XV. This constitution may be amended by motion at a general assembly, to be approved by the Chancellor.

大阪学院大学国際学論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は国際学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格者は、原則として本学国際学学会の会員に限る。ただし、次の場合は会員でない者も役員会の議を経て掲載することがある。
 - (1) 本会会員と共同執筆の者
 - (2) 本会会員の推薦がある者
 - (3) 本学大学院博士課程の院生で、指導教員の推薦がある者
3. 原稿用紙は本学の200字詰用紙を原則として横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。また、ワードプロセッサ等による原稿の取扱も字数においてこれに準ずる。
 欧文の場合は原則としてタイプ用紙に30行で30枚とする。
4. 原稿は、
 - ア. 論説
 - イ. 研究ノート
 - ウ. 資料
 - エ. 書評
 に区分して投稿し、いずれにも必ずレジюме（英語、独語、仏語のどれかに依るもの）を付けることとする。但し、外国語で書かれた論説・研究ノートの場合は、日本語のレジюмеも可とする。
5. 論説および研究ノートについて査読を行い、掲載の可否については編集委員会が決定する。なお、出版時には原稿受理および掲載決定の日付を明記する。
6. 発行は原則として、前期と後期の2回とし、6月、12月とする。年間ページ数は450ページ以内とする。
7. 抜刷は40部を無料進呈し、それを超えて希望する場合は編集委員会で超過分の額を決める。
8. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。
 なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
9. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、平成25年4月1日から適用する。

大阪学院大学国際学論集執筆要領

1. 原稿は最終稿とし、校正の段階でページ替えとなる加筆や削除をしない。
2. 邦文原稿の挿入欧文は、ワードプロセッサ等に依るか、明瞭な活字体で書くかする。
3. できるだけ現代かなづかいと常用漢字を用いる。
4. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
5. 脚注はまとめて本文の末尾に置く。
インデックス番号は上つきとして片括弧〔例・・・4〕を用い、通しナンバーとする。
6. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示する。説明文は別紙にまとめる。
7. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は、厚手の台紙に貼りつけて、希望の縮尺を記入すること。
8. 執筆者校正は2校までとし、何校目かを朱筆する。2校以前で校了してもよく、その場合は責了と朱筆する。
9. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるので特に注意されたい。
ア. 校正の際、内容に大きな変更を来たさないものの、やむをえず組み換えがなされたとき
イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわったとき
10. 原稿の提出期限は原則として3月末と9月末とする。
11. 原稿の提出先は編集委員宛とする。
12. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し出て受け取る。

以上

2023年度 大阪学院大学国際学学会会員（2023年12月31日現在）

石川武敏	伊田行秀	井上専
黒田泰司	鴻巣玲子	小林泉
近松明彦	永田雄次郎	根無喜一
根無新太郎	真山全	三井清弘

（50音順）

大阪学院大学国際学学会役員

会長 広野好彦	編集委員 尾崎庸介
副会長 三輪信哉	山口悟
庶務委員 中則夫	
松本芳明	

執筆者紹介（掲載順）

近松明彦（外国語学部 教授）
 根無新太郎（法学部 講師）
 クリストファー・ミュラー（国際センター 講師）

国 際 学 論 集

第34巻第1・2号

2023年12月31日 発行

発行兼編集者

大阪学院大学国際学学会

代表 広野 好彦

〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号 phone 06-6381-8434(代)

印 刷

大枝印刷株式会社

〒564-0031 大阪府吹田市元町28番7号 phone 06-6381-3395

INTERNATIONAL STUDIES

VOL. 34, NO.1, 2

DECEMBER 2023

Contents

Articles

Serial Verb Constructions in English and Japanese: Non-finite Forms
Comparison
..... CHIKAMATSU AKIHIKO — 1

A Re-examination of the Conservative Faction in the Tongwen Guan
Controversy: Focus on Yang ting-xi's Report to the Throne
..... NENASHI SHINTARO — 29

科学技術の裏抜け－本文に対する科学技術の変革的影響
..... クリストファー・ミュラー — 53

Publications and News of the Members 69

**THE INTERNATIONAL STUDIES ASSOCIATION
OF
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY**